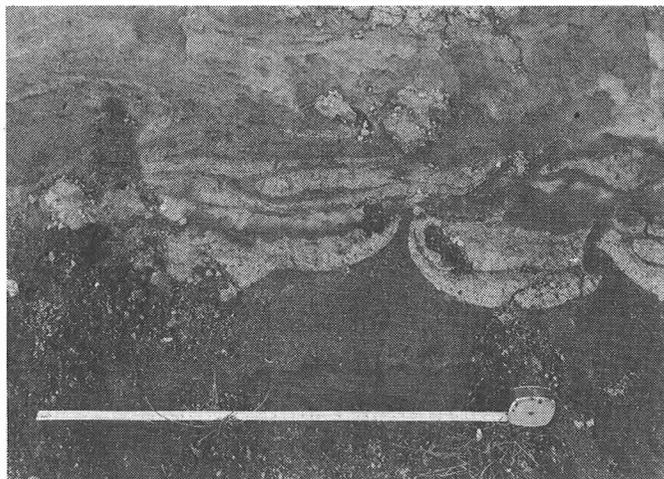
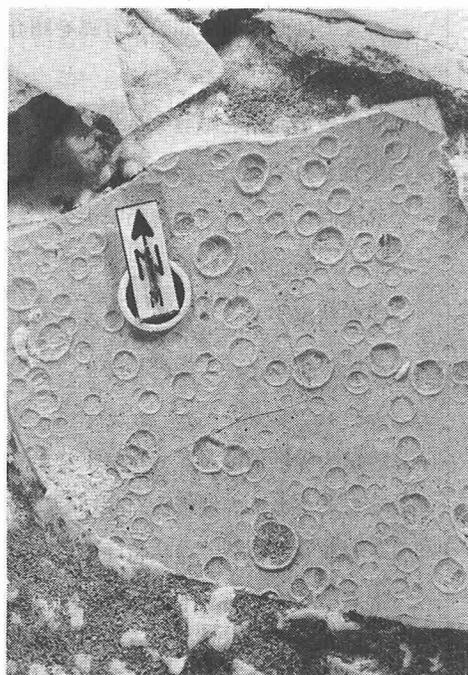


# 廣報

## 東京大学理学部



↑ 雨の化石  
線状土  
氷袋土  
気候の変化を読む

### 目次

表紙の説明	1
理学部を去るにあたって	木村 俊房… 2
木村先生を送る—勤君更尽一杯酒—	岡本 和夫… 3
感謝をこめていただきます	藤田 宏… 4
藤田宏先生を送る	増田 久弥… 6
無題	佐藤 良輔… 7
佐藤良輔先生を送る	松浦 充宏… 8
退官にあたって	稲本 直樹… 9
稲本先生の御退官によせて	岡崎 廉治… 11
草原の輝き	佐佐木 行美… 12
佐佐木先生と共に20年	宮本 健… 13
東京大学—学生たちとの青春—	岡田 吉美… 14
岡田吉美先生の御退官によせて	伊庭 英夫… 15
在職18年を振り返って	飯野 徹雄… 16
飯野徹雄先生のご退官によせて	鈴木 秀穂… 17
退職にあたって	星 圭介… 18
星 圭介氏を送る言葉	土居 喜公… 18
お別れの御挨拶	長田 美子… 19

定年退官に際して	甲斐 正人… 20
宮崎敏夫さんの定年退職を惜んで	酒井 彦一… 21
梅村さんを送るにあたって	武田 弘… 21
石渡綾子さんを送る	小牧 総江子… 23
定年退職に際して	中田 賢次… 24
中田賢次さんを送る	富永 健… 25
原村 寛氏—岩石・鉱物の 分析一筋に30年—	久城 育夫… 26
こんなに狭い理学部の建物… …理学部企画委員会建物小委員会…	28
日加協力事業によるトライアムフ ミュオンチャネルの完成	永嶺 謙忠… 30
ミュオンチャネル完成式典に出席して	上村 洗… 31
雑感	増田 久弥… 32
小柴昌俊先生の 文化功労賞受賞によせて	折戸 周治… 34
理学部研究ニュース	36
学部消息	39

## 表紙の説明

気候の変化は、一般に、時間のかかるフィールドワークによって解読されてきているが、ここでは直観的に明瞭な写真を紹介してみよう。

地表が凍結と融解をくりかえすと、さまざまな模様を描いて礫が斜面を流れおち、山が侵食されてなだらかになる。この現象をソリフラクションという。写真は、乗鞍山頂近い高天原に見られる現成のもので、線状土とよばれる。渡島半島を除く北海道の大部分の地形が、海面に近いところまで、なだらかなのは、ヴェルム氷期に、乗鞍山頂に近いような気候状況があったためと考えられている。これは現成であるが、もし流下中の礫が、たとえばハイマツの上に乗りにかかっているところがあれば、寒冷化を示している可能性もある。

粘土の堆積はもともと水平におこなわれたはずであるが、それが複雑な模様を描いていることがある。堆積後、凍結融解による横圧で皺曲をしたもので、この現象はインボリュージョンという。袋状をなすことが時々あり、氷袋土とよばれる。これは下北半島大間崎近くのもので、上下の地層の関係からヴェルム氷期の形成とされている。

表現は適当でないかもしれないが、雨の化石というものもある。これはベルリン自由大学自然地理学教室の Wolfermann 氏から送られてきたもので、私がとったものではないが、珍しいので紹介しておきたい。場所は東サハラ、チベスチ山地。1966年5月末頃に降った雨で、その時の風向は、穴の形から、北および北東であったと読みとられている。いま完全乾燥の地に雨の化石があれば、かつて若干湿潤であったことを示すが、湿潤地帯で発見されれば、過去の過燥の指標とされる。

地理学教室 鈴木秀夫

## 理学部を去るにあたって

木村俊房（数学教室）

私の記憶装置は相当悪いらしく、昔のことは大半霧の中である。よかった事も大して憶えていないが、一方、嫌なこともかなり忘れてるので、差引すればまあまあであろう。しかし、いくつかのことは憶えているので、それらの2、3を書くことにする。

大学3年(当時は後期といっていた)になり、福原満洲雄先生のもとで平沢義一君と2人でセミナーをやって頂くことになった。その時、先生から論文を書くためのセミナーにしますか、本を読むだけのセミナーにしますかと聞かれた。その頃は、論文などというのは偉大な数学者が書くものであり、定理なども歴史上の人物による発見であろうと考えていたので、びっくりして本の方をお願いします、と答えた。

卒業後、すぐに立教大学へ吉田洋一先生（「零の発見」で御存知であろう）の助手としていった。その頃、立教大学から数学の紀要を出そうという話が起っていて、その議論を聞き、数学者たらんとする者は論文を書かねばならぬということを知った。慌てて問題を探し、それについて考えた。1年程して、幸い小さな結果を得た。福原先生は殆どどの論文をフランス語で書かれていたので、私もフランス語で書いた方がよいと思い、始めて仏作を行った。福原先生に見て頂く前に吉田先生に見て頂いた。その折、吉田先生に厳しく論文の書き方について教えて頂いた。その時の教訓を私の弟子（と思っている人）に生かすのが私の義務と心得、実行したつもりである。

吉田先生のいわれるには、フランス語の定理（théorème）は大きな定理を意味するというので、定理を命題（proposition）に直されてしまった。しかし、命題に落ちぶれたとはいえ、その時得た定理はいまも気に入っている。

立教に11年いて、昭和38年4月東大教養学部に移り、2年半後理学部へ来た。毎週土曜日、福原先生の主宰されていた函数方程式セミナー（いまも続いている）に出席していたので、立教時代も本郷の学生時代の延長という気もあり、戻ったという感じは少なかった。福原先生はその翌年東大を退官された。

以来20年以上が過ぎた。よき師、先輩、同寮、後輩にかこまれ、自由な雰囲気の中かで研究、教育に携れたことは本当に幸せだったと思う。驚いたことは、よくできる学生の多いことであった。後生恐るべしとはよく言ったもので、天才、秀才が輩出するのである。このような学生に接し、とかく無精になりがちな私も頑張らざるを得なかった。

東大紛争などあり、その時は何が起っているのかよく分らず、まごまごしているうちに終わったといつてよい。敗戦の時は16才であったので、よく分らないまま何年も過した。その時の急激な変化に比べ、東大紛争はどんな変化をもたらすかと考えたが、何かが少し変わったという印象しかない。安田講堂落城のあと理学部幹事として半年間学部長室に日参したが、その年の暮から正月にかけて、毎日計算ばかりしたことがある。計算が終った時、体調がくずれ耳鳴りがしたことを思い出す。

東大卒業以来40年近くたったが、その位たつと世の変化がよく分る。それに応じ、いろいろな制度ややり方を変えていくのは当然である。数学教室では昭和63年度からカリキュラム、セミナーのやり方などの改革を行った。これは、もちろん、若い人達の発想と構想のもとに行われた。しかも、その効果に細かく気配りしている。これは教育についてであるが、研究成果にも目を見張るものがある。まさに、後生恐るべしである。もちろん、

問題は多々ある。しかし、私は数学教室の将来について大いに楽観している。

他の教室も同様であろう。理学部のさらに大い

なる発展を念願するとともに、お世話になった多くの人に心からなる感謝の意を表したい。

## 木村先生を送る

—勸君更尽一杯酒

岡本和夫（教養学部数学教室）

私が初めて木村俊房先生にお目にかかったのは、1968年という、当時学生であった私どもにとっての東大闘争、当時教官であった先生にとっての東大紛争の年でした。数学科に進学して最初の週の火曜日朝10時ちょっと過ぎ、1号館350番教室に今と変わらぬ貫禄をもった先生が入ってこられ、微分方程式論の講義が始まりました。私はそれ以来20年間以上、公私共にわたってご指導頂きました。不肖の弟子でありながら長い間お付き合いいただいたということで、先生のご退官にあたり一文を書かせて頂くことになりました。まことに光栄であります。同時に、先生が東京大学から去られるということは厳しい現実とはいえ、残念でなりません。

木村俊房先生は1952年本学理学部数学科を卒業され、直ちに立教大学理学部の助手になられました。同大学の助教授を経て、1963年東京大学教養学部助教授から1965年理学部数学科にお移りになりました。それ以来、ご研究と後進の指導に当たってこられたわけですが、1971年に教授になられて以降は、2度の日本数学会理事長をはじめ、日本学術振興会、文部省学術審議会等の委員を歴任され、研究体制の整備にも多大の努力を払われました。この様な広範な活躍は、我国の数学の発展のためとはいえ、ご自身のご研究と両立させるという難問を引き受けることにもなったと想像致します。それ故のご苦勞は人並ではなかったと存じますが、私にとっては、先生は一貫して数学研究の先達であり、理解者であります。

先生のご専門は、複素解析学とくに複素領域に

おける微分方程式論です。福原満洲雄名誉教授が日本に導入し、基礎付け、発展させた微分方程式論は、木村先生をはじめとする「福原スクール」の方々によって、局所理論については、ほぼ完成の域に達したと行って良いでしょう。勿論、研究すべき課題がなくなったという意味ではなくて、何を調べたら良いかということが明らかになった、ということです。いずれにせよ質的な発展をするために新たな問題意識を導入しなければならない場合に当たって、木村先生は微分方程式の大域理論に注目されました。先生の初期の業績として、一階代数型微分方程式の Malmquist の定理の拡張が有名です。これは、解の特異点の様子から微分方程式の型を決定するという問題で、先生によって完全に解かれました。ご研究の出発点も大域理論であったのですが、長期的な戦略として、先生が私共に強調し続けて来たのは次の2点です。

- (1) 解析的な手法のみにとらわれず、幾何学的な視点、代数的手法を積極的に導入すること。
- (2) 問題意識も微分方程式だけではなく数学全般に求めること。

ご自身の研究テーマも微分方程式にこだわらずに複素解析学へと広げ、数多くの業績をあげられました。それは理学部紀要で紹介されるでしょうから、ここでは敢えて省略致します。私自身も含まれる「木村スクール」には、数学的動機は勿論、先生のお人柄もあって、狭い意味では微分方程式論とは関係の薄い研究者がたくさん集まっております。私個人にとっては先生を慕って集まってくる他分野の研究者、また海外の研究者との交流は

何よりも有難いことでした。

数学以外で木村先生と切っても切れないものはタバコとお酒です。タバコは以前は新生を吸ってましたが、最近はずっと軽いものになりました。私も長い間お付き合いしていましたが数年前に禁煙しました。最近復活の兆しがあり先生に意志薄弱を笑われております。ご自身は禁煙を志したこともないようにお見受け致します。お酒について今更付け加えることはないかもしれませんが、敢えて書きます。以前から酔っても崩れない酒呑みで、その点でも私は不肖の弟子であります。量のほうは、健康管理のためでしょうか、幾分自粛なさっているようです。酒席にご一緒するとよく漢文や古代仏教から題材を採って、いろいろな

お話をして下さいました。その影響で私も中国古典に親しむようになりました。まだまだ、数学非数学諸般にわたって、お教え頂くべきことが残っているようです。

4月から東京理科大学に移られます。数学の研究テーマをたくさんお持ちで、諸事雑用から幾分解散されるから、と張り切っていらっしゃるようですが、お酒の相手に不足したときはいつでも一声おかけください。益々のご自愛とご発展をお祈り申し上げます。横書きでは気分がでないのですが、「漢書」から一節引用して木村俊房先生をお送りする言葉と致します。

夫塩食肴之将、酒百薬之長、嘉会之好

## 感謝をこめて思いたすま

藤 田 宏 (数学教室)

私が物理学科の学生として当理学部に入ったのは昭和23年4月である。数学科の教授として、また、理学部長として停年を迎えようとしている今日現在までに41年が経過した。その間、昭和35年から41年までは工学部にやとわれたが、それ以外の期間は理学部に在籍している。理学部に学び、かつ勤めたこの期間の回想をたどりながら、お世話になった多くの方々への感謝の意を表したい。

昭和23年に東大に入学した私達は標準的には旧制高校の最後から3番目の卒業生である。物理学科に同時に入学した仲間には、遠隔の超新星からのニュートリノはキャッチしたが、惜しくも(いまのところ)ノーベル賞を逸した小柴昌俊君や大学紛争の発端の頃、医学部の学生委員を務めていた藤村靖君、先年惜しくも世を去った平川浩正君、現物理学会長の野野公男君などがいた。ただし、私は1年落第して昭和27年に不破哲三共産党書記長のクラスと合流して卒業した。

卒業後も物理学科には大学院(入学試験などは

なかった)の期間を経て助手まで務め、昭和35年に工学部のいわゆる力学教室(理工学科の一部)に講師として移った。すでにそのときの任務は工学部の学生に応用数学の講義をすることであったが、自分の研究分野が数学に変わって行ったのはもっと早くからである。そもそも、物理に志しを立てたのも、物理が好きであったからと云うよりは、敗戦や父の空爆死などの原体験により、“偉い人間が求め得る確かな価値”を目指してのことであった。下地としては、戦争中も軍国主義の風潮に抗して英語の授業に力をいれ、“学問によって世に立て”と生徒を激励(戦争中では非凡なことである)してくれた母校(旧制浪速高校、7年制)の教育、とくに尋常科時代の教育があった。

物理学科に入って、小平邦彦助教授(当時)や久保亮五助教授(当時)の物理数学の講義を受けた。ともに感動的な両先生の講義であったが、小平先生の講義は数学の高尚さへの誘いを込めたものであり、久保先生のそれは数学の勉強への発奮

を喚起するものであった。物理数学の講義以外にも、いま思えば、応用数学者としても偉大な今井功先生、高橋秀俊先生の講義を受けたのは幸せであった。これらの先生方の影響で数学というよりは数理解析への熱意が醸成された。

最終学年の物理後期期のゼミは、まず山内恭彦先生について物理数学を始めたが、後年アメリカに流出し世界の第一流の数学者になられた、加藤敏夫先生が指導を引き継いで下さった。加藤先生が私の大学院での指導教官であり、助手として奉仕しながら仕込んで頂いた恩師である。加藤スクールの物理数学は当時最先端の数学理論であった作用素論の関数解析を用いて偏微分方程式を主とする数理物理の問題を数学的厳密さで研究することを目標としたものであり、吉田耕作教授やJ. リオンス教授などの国の内外の数学者により高く評価された。

私が助手の頃から、数理科学の大規模な研究班が組織され、全国の数学者、応用数学者、数理物理学者などの接触が盛んとなり、共同研究集会在が頻繁に行なわれた。その成果の一つが現在の京大の数理解析研究所の設立である。おかげで私は上記吉田先生のセミナーに常連的に出席し、また、全国の多くの数学者の知遇を得て、本式の数学の刺激を十分に与えられた。

工学部に移ってからもこの状況は続き、自分のペースでの固有の研究と共同研究による刺激が両立して、私としては研究成果があがった時期である。工学部では森口繁一先生や現工学部長の伊理正夫さん等の優れた応用数学者にお近付きになれて幸せであったが、その一人である故鷺津久一郎教授が、私が理学部数学科への異動を相談した際に印象的なことを言われた。「工学部は年寄りをお大切にしますが、理学部は若い人の天下でしょう。教授になって理学部から工学部に移るのは賢明ですが、その逆をやる貴君の気が知れません。」当時37才で、まだ若いつもりであった私は、鷺津先生の折角の忠告に従わなかった。

工学部にいたら果してどれだけ大事に扱われた

かは分からないが、以来数学科では充分大事にして貰った。初期の頃は長老の先輩に支援していただき、終始一貫して尊敬する同僚に啓発され、さらに自分が年を取ってからは、学問の才にも（近ごろ珍しい）愛老精神にも富んだ弟子達に恵まれて、大いに幸せであった。献身的に面倒見がよい数学科の職員の皆さんの親切も大きな支えであった。研究面では些か不完全燃焼の悔いが残るが、私が中途半端の所で停止した課題の多くが、最近に到って後輩の英才達によって著しい進展をみせていることは学者冥利と言うものであろう。

さて、私が理学部に戻って間もなく東大紛争が起こった。昭和43年の秋に交換教授としてパリ大学に滞在していた私は、吉田先生から東大の存立に関わる重大事態が起こっているから直ちに帰国するようにとのお手紙をいただいた。急遽帰国の途についたが、そのときの日航機の中で配られた新聞により東大の全学部長が交替し、新理学部長に久保先生が就任されたことを知った。その年の春頃にニューヨークに居て、コロンビア大学の学生紛争を高見の見物していたのが、今はわが身となり、帰国してみると東大の動乱状態も激甚で数学科の全教授が疲労困憊しておられた。そこへ長期の海外出張で充電したような顔をして帰ってきたものだから、早速に数学科の主任にされ、過激派学生の矢面に立つことになった。数学科は闘争する学生にとって、とくに共関係の諸君にとって拠点学科の一つであった。

何しろ学生時代の恩師の久保先生が学部長として難局に当たっておられるのであるから、数学科主任として以外にもいろいろ特命を受けた。昭和44年1月18日の早朝に大警官隊が安田講堂他の建物の封鎖を解除するために構内に突入したが、理学部一号館を受け持った第四機動隊の立会い人を命ぜられた私は、伊原康隆助教授（当時）と共に盾を持った巨漢のボディガード付きで本富士署から一号館まで駆け足をした。その直前に封鎖中の一号館で占拠部隊の中にいた数学科の学生数名と単身で深夜会見し、“外人部隊”による容赦の無い

破壊から図書室等を守る相談をした記憶が鮮明に残っている。安田講堂が落城して加藤一郎総長代行が民青系学生に焦点を合わせて収拾を図られてからが、また一苦勞であった。収拾に反対する共闘系の数学科学生が学科闘争を組み、団交を仕掛けてきたからである。当方の若気もあり、数学科の学生となれば同学の後輩であるとの浪速節もあり、念入りに団交に応じた。老教授の主張が学生側のそれと一致したりして主任として慌てる場面もあったが最後は後味の悪くない幕切れを迎えた。学生側に反抗の美学や自己陶醉が過多であるものの、過激な主張のなかにも自分の意見に責任を持つ潔さがあり、最近見かけるような“退廃的な甘え”がなかったせいであろう。最終段階ではやはり単騎(当方)で学生側のリーダーと交渉した。このときの相手をはじめ数学科闘争のリーダーの多くが現在数学の各分野で一流の研究者として重きをなしている。“怪我人”を出さないことを旨とした藤田主任の終結策が悪くなかったのであろう。

紛争の後の改革論議が盛んな頃、小平先生が理学部長になられた。収拾策に流れがちな改革論議のなかで学者の見識に徹すべき理学部の代表とし

ての衆望を担われたわけである。またしても恩師が学部長になられたので、しっかり奉公するはめになった。学部長を補佐する幹事として、教授選考委員会の設置に関する原案を作成した思い出がある。

学問それ自体の推進を別とすれば、やはり、理学部教授会の最大の責務は良い人事の遂行である。自分で学部長を務めてさらにその思いを強くした。ついで、教授会の信任を得て理学部の意志決定に重い責任を持つ、学部長、評議員、各種委員の選挙も、学問の自治につながる真剣な課題である。これらに取組む理学部の伝統的な姿勢は理想に近いものであるが、今後とも理学者に不似合いな思惑・打算などに振り回される事なく“理によって立つ理学部”の筋を貫いて頂きたい。それに、大小様々な教室・施設を抱え、理学を愛すること以外には共通項のない多様な研究にいそむる学部人の一体感の拠り所として“他者への思いやり”を加えて頂きたい。これが停年直前に学部長を務めさせて頂いた私の理学部の皆さんへの老翁(?)心をこめての遺言である。

長い間、いろいろと有難うございました。

## 藤田宏先生を送る

増田久弥(数学教室)

有名な受験参考書「大学への数学」の著者として先生のお名前は受験生であったころから存じあげておりました。直接お顔に接しましたのは、当時吉田耕作先生のご指導の下に関数解析と偏微分方程式を勉強いたしておりました修士2年のときであります。先生はちょうど吉田先生によってつくられた半群の解析的理論、作用素の分数べきの理論をナビエ・ストークス方程式に見事に適用し大きな成功を収めておられた時期でした。講義は先生御自身のお仕事の解説でして実に気迫のこもった名講義に多くの聴衆は深い印象を受けまし

た。私自身ナビエ・ストークス方程式が私の主要な研究テーマのひとつとなりました。最初の講義でナビエ・ストークス方程式の物理的背景を説明された後この方程式に関する数学的研究が世界的にどうなっているか、の鳥瞰図を示され「この分野は大切だがほとんど研究されていない」とかコメントをつけられました。この講義の後まもなく出版された論文は専門家はもとより多くの数学者に影響を与えました。

当時常微分方程式を専門として現在は無限次元力学系の大家である D. Henry はその著書の序

文の冒頭で “I read the beautiful paper of Kato and Fujita on the Navier-Stokes equations and was delighted to find that, properly viewed, it looked liked like an ordinary differential equation ……” と無限次元力学系を研究するようになった動機を間接的に述べております。

その後、先生は熱方程式の解の爆発の問題、近似計算—特に有限要素法—の研究にすまされてその研究はいまでは古典となっておりその後の大発展の契機となりました。応用数学のための日本ではじめての雑誌 Japan Journal of Applied Mathematics の創刊など日本の応用数学の興隆にもたいへん情熱をかたむけられ大きな道をつくられました。日本数学会の理事長として数学全体の研究体制の整備にも尽力されました。

また数学教育の重要性を深く認識されこの方面

にたいしても国際数学教育学会の日本代表として活躍されるなど国際的視野にたっのご見識は数学教育関係者の中で重んぜられ行政に反映されているとうかがっております。

現在理学部長として大学全体の行政、特に新しい入学試験制度の確立という困難な問題において大変に尽力されて、ここにおきましても道をつくられておられます。

先生は個人的には大変情のあつく浪花節的などころがあります。興に乗るとドイツ・リートをお歌いになったり、マージャンにこって FMC (フジタ・マージャン・クラブ) を結成されたりしました。

我々学生の前に火の玉となって現われた先生がまた火の玉となって理学部を去ってゆかれる。

先生、どうぞいつまでもお元気で。

## 無 題

佐藤良輔 (地球物理学教室)

理学部広報の編集委員長から教室主任を通じて、退官に際して何かエッセイを書くようにいわれました。しかし今更カキオキをするようなことは何もないし、かといって先輩の竹内均先生のように一行ですませるといふ度胸もないので、ナヤンでいるうちに締切日が迫ってきてしまいました。そこで思い付くままに (くるしまぎれに) 一つだけ書いて見ることにしました。

ごく最近の新聞のコラム記事に、作家の高田宏氏が書かれた「二分間スピーチ」というのがありました。故人となられた詩人の草野心平氏や山本太郎氏が主宰されていた会合では、外部の人を招いて二分間だけのスピーチをやって貰っていたようなのですが、その会合では、二分間たつとカネが鳴らされて、それまでに話が終わっていないと罰として枡酒を吞まされ、それから一分超過す

るごとに、枡酒を一杯ずつ吞まなくてはならなかった、という内容のものでした。恐らく二分間もあれば話の要点はまとめられる筈だという考え (+ ジョーク) に基づいているものと推察します。

そこで正直に、かつ勇気をだして書くのですが、私がこの記事を読んですぐ思ったのは、教授会の「人事に関する件」のことでありました。昔と違って学問分野が極度に分枝化した最近の状態では、“1, 3, 5の論文は……”という (詳しい) 説明だけで、専門分野の全く異なる研究業績のことを判断せよといわれても (いわれてはいないのかも知れませんが) ドライ無理な話だ、と少なくとも最初の頃は (!) 思っていましたので、「投票」するのがためらわれたことも多々あったというのが正直な所です。そのうちに、候補者の業績を最も良く理解されている方は推薦された方なのだろ

うし選考委員会の方々なのだろうから、こんな場合は信用するしかないと思うようになりました。勿論選考委員会の方々のはかにも候補者の業績や人間性を良く知っている方がおられるでしょうが、そういう方には「詳しい説明」はそれ程必要としないでしょうし、それに投票までに一ヶ月あるのですから、「短い説明」は決して障害にはならないと思うのです。ところが、恐らく多くの方がそう思っておられる筈なのに（とりたい）、説明される方は、「短い」と候補者に申し訳ないと思われるせいなのでしょう。それとも、カルクナルとでも思われるせいなのでしょう。なかなか短くならない。そこで、内規上(?) どうしても説明が必要であるのなら、いっそのこと時間をきめておいてチーンとやって(まさか枅酒まで用意することはないでしょうが)、あとは質問を受けるといふ風にはいかないものなのでしょうか。このことを私の周りの何人かの方に話した所、皆さん賛成でした(もっとも心の中ではそんなことなどできっこないと思っておられたのかも知れませんが)。

提案というのは、それを全く無視されると提案者は何ともバツの悪い気持ちになるものですが、私はお陰様で三月一杯で「卒業」しますので、とにかくこの際、人の言わない(言えない?)ことを言った上で、それが無視されても一向に平気でありますことを申し添えておきます。

最後に筆の勢いでもう一つだけ書いておきます。確か物理の小柴先生だったと思いますが、退官の際の最後の教授会の時、“教授会をせめて二時間で終了するようにすれば、若い人達ももっと出席するようになるだろう”という主旨のことを話されました。全く同感です。私の今までの経験では、教授会は昔より(紛争の頃は別として)随分長くなっているような気がします。〇〇委員会というのが多くなりすぎたからでしょうか、それとも、二分間ですむ話を十分間(枅酒九杯分!)話さないと気がすまないという論客が多くなったからなののでしょうか。

それにしても長い間お世話になりました。理学院として益々の発展を心からお祈り申し上げます。

## 佐藤良輔先生を送る

松浦充宏(地球物理学教室)

佐藤良輔先生は、昭和28年に東京大学理学部地球物理学科を卒業された後、大学院研究奨学生を経て、昭和33年に東京大学理学部助手として任官されました。昭和35年に東京大学から理学博士の学位を授与され、昭和41年には理学部助教授に昇任、昭和55年からは理学部教授として地球物理学教室の地震学講座を担当されております。先生は、この間、大学院理学系研究科地球物理学専門課程主任、地殻化学実験施設長、地震学会委員長(現行会長)、地震予知研究協議会議長など多くの要職につかれ、広く日本の地震学の発展のために尽くされました。先生は、又、四半世紀もの長きにわたり、欧文の固体地球物理学専門誌(JPE)

の編集長として、その育成と発展に尽力されてこられました。更に、昭和60年に我が国で初めて開催された国際地震学・地球内部物理学協会(IASPEI)第23回総会では、国内組織委員会事務局長として活躍されました。

私が地球物理学科に進学して初めて佐藤先生の講義を受けたのは、もう20年も前のことになります。当時の地球物理学科の講義は多少いいかげんなところもあったのですが、先生の講義は、大変分かりやすくきちんとしたものでした。その後先生と親しく接する機会が増えるにつれて分かってきたのですが、先生は、この「きちんとする」ということを、単に講義だけに限らず、何事におい

でも信条とされておられたようです。もっとも、先生は大変お酒がお好きで、よく我々学生連中を飲み連れて行って下さいましたが、そのような時は例外で、何時もきちんとしておられる先生が、堅苦しい信条などはすっかり忘れ陽気な「お父さん」に変身してしまわれるのが常でした。これは、多分、先生の気分転換法の一つだったのでしょうが、我々学生連中は、そんなところにも先生の人間の魅力を感じておりました。

私が大学院に進んで佐藤先生の指導を受けるようになった頃、先生は英国から戻られて間もない気鋭の若手助教授でありましたが、すでに理論地震学の大家としての風格をそなえておられました。当時、地震学研究室には私と同期の修士の学生が4人もおりましたが、先生は、この4人の学生全員を一人で指導されてしまわれたのです。今、自分が学生を指導する立場になってみて、それがどんなに大変なことであったか身にしみてわかりません。修士課程の学生に対する先生の指導は、テーマの選び方、問題へのアプローチの仕方、果ては論文の書き方に至るまで、実に懇切丁寧なものでした。博士課程の学生に対する指導は、これと反対で、何時でも相談には乗るが、あくまでも本人の自主性を尊重するというものでした。このような指導方針の違いは、「博士課程は自分で問題を見つけ解決していく一人前の研究者になるための

訓練期間である」との先生のお考えによるものです。

先生の学問的興味の中心は、一貫して、地震波の発生と伝播に関する理論的研究にありました。1960年代には、主に発震機構と地震波の減衰に関する基礎的研究に力を注がれ、1970年代には、「食い違い理論」に基づく実体波や表面波の理論地震記象及び地殻変動などに関する研究を精力的になされました。これらの研究は、いずれも、その後の理論地震学発展の基礎となる重要なものでした。また、1980年代に入ってから、短周期地震波の発生と伝播の研究を通じて地震動災害予測に関連した分野でも活躍されました。先生は、常に一兵卒として研究の最前線に立つことを好まれました。研究に対するこのような基本的姿勢は教授になられてからも変わることなく、今でも、わずかな暇を見つけては御自身で計算プログラムを組み、端末のキーボードを叩いておられます。

先生は、今年の3月をもって東京大学を退官されますが、これからもお好きな地震波動理論の研究を続けていかれることと思います。先生は、助手、助教授、教授の時代を通して、実に多くの弟子達を育ててこられました。その多くの弟子達を代表して、これからの先生の御健康と益々の発展をお祈り申し上げます。

## 退官にあたって

稲本直樹（化学教室）

光陰矢の如しと言いますが、月日の経つのは早いもので、昭和23年に理学部化学科に入学してから、はや40年余が経過しました。昭和37年から38年にかけてカナダ・トロント大学に留学した1年2ヶ月を除いて、今迄の人生の2/3は理学部にお世話になったこととなります。

先ず第一に思い出されますことは、紛争の最中

の昭和44年6月に、今の理学部7号館の場所にあった私の研究室の一室より夕方出火し、一部屋焼失したことです。私は学会の用務で名古屋に出張中でしたが、虫の知らせか、会の途中で帰ってきてこのことをききびっくりしました。当日は東大内で何か起こりそうとかの情報で、テレビカメラが近くに待機していて、煙をみてかけつけ、中継

したそうで、化学教室はじめ理学部の皆様方に大変御迷惑をおかけし、またお世話になりました。

翌年1月には機動隊導入で安田講堂攻防戦になりましたが、その折、加藤一郎総長が様子を見たいとのことで、当時の久保亮五理学部長、赤松秀雄教授が安田講堂に最も近い化学最新館（現在の化学本館）屋上に案内することになり、私も警備役として約一時間御一緒致しましたが、加藤総長から「学生もなかなか頑張っていて機動隊も苦戦だね」という言葉を聞いたのも20年前となりました。

昭和58年、学生委員会委員長として五月祭常任委員会との協議では苦勞し、やめてから胃潰瘍をやりました。五月祭の時の農学部グラウンドでのロックコンサートの大きな音量と終了が20時頃になるなどが問題となっており、周辺の方々から苦情が殺到すると聞いていました。この問題が協議の項目となることは確実で、私には手に追えそうになかったので、学生部と相談し、法学部からのY教授と同席で会ってはそのことで、そうしたところ、さすがは法学部の先生で、法律論、判例などをひいて説得したのはさすがと思いました。その時の学生側の正副委員長はかなり協力的であったことも幸し、音量には問題がありました。終了時間は約束の18時（周辺町内会長からの直前の申し入れ時間でもあった）をほぼ厳守してもらえ、抗議の電話は今年はなかったと平野総長よりねぎらいの御言葉を賜りました。しかし、翌年はまた終了がかなりおくれたと聞いています。

また、あるサークル企画であるタレントのコンサートが予定されていましたが、五月祭間近になり、本富士署もつかんでいないある右翼(?)団体から、東大にふさわしくない人だからコンサートを中止せよ、さもなければ実力で阻止するとそのサークルに電話が頻繁にあり困っているとの申し出があり、その対応にも苦慮しました。既にかなり前売券が出ているのでサークルとしては中止できないとのことで、前日夕方委員会で検討し、ともかく中止とし、その対策を伝える掲示を出すこ

ととし、その文案をY教授と夜半に電話で協議し、学生部に指示しました。当日、それとなく会場周辺に何人かを交代で配して注意していましたが、幸にも何事もなくすみ、ほっとしました。

停年の前3年間は環境安全センター長に任命され、石綿問題が工学部、地震研からわいてきて、石綿問題担当の有馬朗人総長特別補佐らとその対応を頻繁に協議しましたが、有馬先生なので相談がしやすく、助かりました。色々面倒な問題が出てきて、一時はどうなることかと思いましたが、石綿の取扱いマニュアルもでき、除去工事もスムーズに行なわれており、ほっとしています。

研究の面では、よいスタッフ、学生に恵まれ、自由に好きなことをやらせていただきました。流行の研究はせず、定説を疑問の目をもって眺め、総合的に考える立場で仕事をしてきましたが、9年前、今迄は不安定で単離できないとされていた化合物群のいくつかを、かさ高い基を導入することにより単離に成功し、この方面の研究を世界的に活発化できたのは望外の喜びです。また、周期表でもわかるように、化学は周期性の立場から整理されています。しかし、総合的かつ定量的に考える際には不便もあり、周期性を消去して直線的に考える方法にめどをつけましたが、雑用に追われ、そのままになっています。これからは暇もできると思いますので、できるだけこの考えを発展させたいと願っています。

最後に、長い間お世話になった理学部の諸先生方、事務の方々には心から御礼申し上げますとともに、皆様の御活躍と理学部の御発展をお祈り致します。

## 稲本先生の御退官によせて

岡崎 廉治 (化学教室)

稲本直樹先生は昭和26年東京大学理学部化学科を卒業され、29年東京大学理学部助手になられました。その後同講師、助教授を経て40年に有機化学第一講座の教授に昇任されました。その後25年にわたり、窒素、リン、硫黄、セレン、ケイ素などのヘテロ原子を含む有機化合物の研究を一貫して進めてこられました。今日では、ヘテロ原子化学は有機化学の中で一つの大きな分野に成長して確固とした位置を占めており、第一回のヘテロ原子化学国際会議を日本で開催するほどにこの分野における我国の研究が活発になっておりますが、その流れを身をもって作ってこられた先生には、御退官にあたって感慨深いものがあるのではないかと推察致しております。

先生とともに過した20余年を思いおこしながら、先生のお人柄などについて、二、三ご紹介したいと思います。

私が先生に初めてお逢いしたのは、学部三年生の有機化学実験のときであったと思いますが、その後先生が所属しておられたのと同じ研究室（島村研究室）に私も入りましたのでお逢いする機会は多かったはずですが、入りたての大学院生には講師になっておられた先生は雲上人のようで、また先生が寡黙の人であったこともあり、ほとんどお話しをしたという記憶がありません。しかし、大学院の先輩から、稲本先生は島村教授がパトロール（実験室に実験経過などを聞かれるために先生がまわってこられるのを学生はこうよんでいた）中に声をかけても実験に集中しているあまりそれが聞えず、島村教授がすごすごと実験室から出ていかれたなどという話を聞かされて、私や多くの先輩が島村教授がそばにいただけで緊張して手からフラスコを落しそうになったことを考え、稲本先生の集中力と豪胆ぶりに敬服しておりました。

さて話が急に飛躍しますが、先日昭和天皇崩御の折、さまざまな人達がお人柄にふれていた中で、私の印象に強く残ったことがありました。誰であったか失念してしまいましたが、特筆すべき人柄として公平さをあげていました。この小文を書くにあたって稲本先生とともに過した年月の間のさまざまな出来事をふりかえてみて、稲本先生もまた御自身ではこの公平さを最も大切にされていたのではないかということに思い至りました。研究室や学生の教育においてだけではなく、学術雑誌の編集委員長としても、またさまざまな学会活動においても、いつもそれを心がけておられたように思います。これは一見あたりまえのようで、終始それを貫ぬくことは、なかなかできないことのように思います。

先生は一昨年4月より環境安全センター長を務めておられます。第三代センター長であり、センターの業務も順調に進んでいてあまり大きな問題はなであろうとの大方の予想を裏切って、アスベストの問題が起り、大変苦労されたようにお見受けしました。一応の解決をみたとうかがっておりますが、それも恐らく、持前の公平さで誠実に努力された結果であろうと思っております。

先生の長年にわたる研究と教育に対するご尽力に感謝致しますとともに、御身体を大切にされ新しい職場での益々のご活躍を期待致します。

## “ 草原の輝き ”

佐佐木 行 美（化学教室）

湯川博士のノーベル賞の影響で東大理学部は物理の人気の急騰とその反動で化学の入試倍率が落ちた事、また入試科目に数学が無くて語学偏重であったことが幸いし、やっと化学に入学できたのは昭和24年の事だった。

入って早々活動家の上級生にきかされたのは、秋には人民政府が出来るから化学実験の単位をとっても無意味とのことであった。

学生時代は三鷹事件、朝鮮戦争（その頃やっとビールが自由販売になった）と南原総長の全面講和論争と騒がしく、人民政府は出来ぬまま単位も有効で、長崎の残留放射能の分析を卒論に卒業するとすぐメーデー事件に会う。研究室ではビキニの灰の放射能分析に明け暮れ、30年に助手にして頂いたが落ち着かず、辞表を書くこと四度、辞職して1万円前後の退職金を頂くこと二度、外国放浪後、蠅のように追っても追っても戻って来ると言われながら新設の無機合成化学講座に着任したのが38年であった。その後は26年間東大で万博、大学紛争に続いて石油ショック、ロッキード、リクルートと昭和の終るまで多くの出来事を経験する事になる。中でも安田講堂攻防とアポロ月面着陸では教室中用務員室のテレビの前に釘づけになった記憶がある。しかし60年安保の熱気と“挫折”だけは外国の新聞で見ただけなので残念ながら他人事の様で親身に感じられない。

仕事に使った器具、機械も大変な進歩で手動計算機が電動、ついで電子化する。大形計算機の発達は限りがなく出力の紙は実験室に溢れる様になり、美濃紙に“一身上の都合により……”と毛筆で書いていた私もワープロ無しでは書類一つつくれなくなった。

1950—60年頃研究生活を過ごしたヨーロッパを再訪して見ると一緒に実験をやった友人は教授に

なっているが、その大学の大学は紛争を経験した後、ラジカルな学制改革を経て民主化が進み産学共同の進展とともによい意味でも悪い意味でも東大同様昔のアカデミックな雰囲気は失ってきた事が感じられる。一般にヨーロッパの大学の研究室での日常の話題も専門テーマを離れると駄洒落か以前はタブーだった車の話や税金の話で、昔の“知的”な雰囲気は薄らいだ感がある。

ウィーンの友人はこれはビートルズから始まった悪民主化現象だと憤慨するが別に彼等が悪いわけではあるまい。確かにアカデミーの委員会でコミックスを読んだりビートルズに倣って“ベートベンは詩がよいね”ととぼけたりするのは古い権威を嘲笑する下克上の痛快さはあっても、どこでもそれを形だけ模倣し真剣な議論から逃避しようとする知的怠惰の弊害は計り知れないであろう。

では“本学”の学生はどうであろうか。

この26年間研究室や教室で出会う学生は学校制度による変化、団塊の世代、共通一次を経ていいには新人類と変わったが、一貫して私に東大にいる幸福感を与えてくれたのは、彼ら学生の持つ一種の余裕とも言うべき風格であった。

研究室には漫画本に混じって読めない外国語の不思議な図書（中世教会スラブ語？ ウェールズ語？）、どこから見つけて来たのかをいぶかる様な仏教説話文学書、ルネサンスの詩集又突然法相宗の教義書等が常に見いだされる。

受験戦争の勝利者らしく理化学、動物学、生理学、哲学、歴史、文学、音楽、何についての話題でも水を向ければ誰かが口をはさむ。この様に老人相手のうまい学生とつき合っていると孤独を感じる暇も無く、又困ったことに新聞が騒ぎ立てる日本の教育の危機も忘れてしまう事になる。

アラン・ブルームが最近有名になった“アメリ

カン・マインドの終焉”で嘆いて居る様に、全人的なルネッサンスの教養主義は世界的に大学から消滅しつつあり、何処でも“研究者”とその“管理者”が増加して“学者”が減少する傾向は致し方無い。

## 佐佐木先生と共に20年

宮本 健（化学教室）

佐佐木行美先生がああ若々しきで御退官になる。まさに光陰矢の如しである。

初めて先生にお会したのは筆者が学部3年の学生のころで無機化学Ⅱの講義であった。当時先生は御結婚直後で、薬指にはめた指輪が気になるのか、机の上に置いてみたり、また指にはめてみたりしながら、周到に用意された講義用ノートをパラパラめくられ、例の早口で講義を進められた。我々学生は指輪が気になるのと、板書した文字を先生が直ちに消してしまうので、ノートをとるのに本当に四苦八苦した。講義でのお話（たしか種々の溶媒での酸と塩基の定義であった）は面白く、無機化学はこんなにも系統的で美しい学問なのかという誤解と感慨を我々学生に与えた。これが正真正銘の純化学者、佐佐木行美先生に対する最初の鮮烈な印象であった。

その後、先生の研究室で卒業研究、大学院修士課程とお世話になり、どういう御縁か研究室の助手・助教授を勤め21年間も苦楽を共にすることにあいなった訳です。

先生は30年間一貫して、ポリ酸陰イオン（無機縮合酸イオン）の溶液化学、構造化学の研究を着実に進められました。その哲学的背景となったのは何だったのでしょうか？御自身の執筆された「化学総説13 八面体の配位立体化学」（日本化学会編、昭和51年刊）の中で仏教哲学書“阿毘達磨具舍論”を引用され、次のように述べています。「書の中には、時間の単位として“却”から“刹那”迄の定義や  $1.28 \times 10^9$  年の周期で発生と消

しかしゆとりの無い所に文化と真の科学はない。東大に関する限り化学の実験室の書架に“無用の”哲学書や文学書が漫画本に混じってでもよから何時までも残っていて欲しいものである。

滅を繰返す宇宙の雄大な記述等多くの自然哲学が含まれているが、今我々の興味を引くのは一種の八面体とみなせる分子モデルである。位置があって大きさのない“極微”=原子の一つが、上下前後左右同様な原子に囲まれて一つの大きな原子となり、この新しい単位は7個集まって一つ上の段階の単位となる。このように“分子”の様なものは  $7^n$  個の極微を含み、巨大なものに成長して行く……」。この比喻の正確な理解は、到底筆者には不可能ですが、古今東西の文化・歴史に通暁されていますから、自然科学成立過程の礎である博物学を背景として、ポリ酸の基礎研究を無機合成化学として推進、開花させようとお考えになったのだと推察しています。しかし現在の日本での自然科学基礎研究に対する環境はまことにきびしく、先生の夢は完全に実現されたとは言えませんが、教えを受けた門弟達はその理想を実現し、一層発展させることを期待しています。

最後に一言。佐佐木先生を語るに女性を抜きにしては考えられません。先生は日頃から学生に対して強い個性の矜持と弱い立場にいる人達への同情の気持ちを忘れないようにと指導されていました。そのせいか佐佐木研究室には、続々と有能な女子学生が集まり、一時は「佐佐木女学院」と称されるほどでありました。その後研究室出身の女性研究者が先生の御尽力のかいあって、すくすくと育ち、化学界では「女性学者の育成者」としても御高名です。昔から先生は多くの良き女友達に

も恵まれ広い交遊関係をお持ちになっていることは、筆者にとっても羨ましい限りでありました。どうか行美先生、御退官後は女性だけでなく、立

場の弱い若い優秀な男性研究者達も周囲に数多くいることをお忘れなくお考えいただき、今後共よろしく御指導のほどお願い申し上げます。

## 東京大学——学生たちとの青春

岡田吉美（生物化学教室）

学園紛争の傷あとがまだ生なましく残っている東京大学に私が着任したのは、17年前の夏の初めの頃でした。植物ウイルス研究所という農林省の研究所から移ってきた私には、久しぶりに見る若い学生たちの姿がとて新鮮に映りました。恐れることを知らず、ためらうこともなく、そして後ろを振りかえることもなく、たゞ若さゆえに許されるすべての特権を誇示して、あるいは破滅に向うかも知れない道を駆け抜けていく姿。それは自分の若かった頃の姿の一面でもあり、そしてまた私の人生で私自身が切り捨てようとしてきた部分でもありました。学生たちとめぐりあうことのできる東京大学への着任は、私にとって、通り過ぎていった青春をもう一度呼び戻すことのできる春の季節であったような気がします。

こうして何年振りかの学生たちとの研究生活が始まりました。毎年毎年、すばらしい資質に恵まれた学生たちと巡り会い、熱い想いを共に語ることができました。研究所時代の私は、自分一人の世界の中でもものを考えることに慣れていました。しかし東京大学での17年間は、自分一人ではありませんでした。若い学生たちとの輪の中にいることができました。そこには喜びも哀しみも、笑いも涙もありました。

「遇うと遇わざるとは時なり」という中国の言葉がありますが、忘れられない学生との出会いの数々がいま懐しく思い出されます。学生たちの運命のスタートを決め、それが私自身の人生をも決めたいいくつかの出会いを、私はこれからもいく度か思い出すことでしょう。自らの青春と、学生たちとの青春と、私は二つの青春を持つことのでき

た幸運を感謝せずにはおられません。

私は多くの学生の指導教官となりましたが、それは私が多くの学生によって支えられてきたという意味であることをよく知っています。そして私が学生の中にあって幸せであったということが、学生たちも私とともに幸せであったということであってくれば、どんなに嬉しいことでしょう。その答えは学生たち自身がこれからの研究生活で出してくれることでしょう。21世紀をたっぴり見ることのできる若い人たちが、その時代の輝かしい担い手となって大きく羽ばたく姿を私は待つことにしましょう。

世は昭和から平成になり、間もなく私も東京大学を去ります。動乱の昭和の歴史が個人の歩みと色濃く重なる私にとっては、この上ない大きな心の区切りのときが一度にやってきたような気がします。日本語の別れの挨拶は「さようなら」と言います。私が昭和と東京大学へさようならをいうときは、私が学生との青春にさようならをいう時でもあり、もう一度私の人生で何ものかを切り捨てるときでもあるのでしょうか。

そのような感懐にふけりながら自分の回りを見回したとき、17年前の学生たちに覚えた新鮮な感動がいまないのはなぜでしょうか。私が年令をとったからなののでしょうか。それとも学生たちがずっと大人になってしまったからなののでしょうか。そんな想いを心の片隅に抱きながら、だからこれだけは言っておきたいと思うのです。「若い学生諸君よ。君たちの生き方はいつまでも後輩に向けての新しいメッセージを送り続けていなければいけないのだ」と。

## 岡田吉美先生の御退官によせて

伊庭英夫(生物化学教室)

岡田吉美先生は、本年の3月をもって定年退官されることとなりました。先生は昭和47年7月、理学部生物化学科へ教授として御着任以来、当時の学生にとっては接する機会が極めて少なかった分子生物学の基礎知識や思考法を一から丁寧に教育されることから開始され、この17年に渡り、ウィロイドから高等生物に至る幅広い材料系に対して分子生物学の手法を駆使され、先導的な研究を続けてこられました。

岡田先生は、大阪大学理学部化学科の赤堀四郎先生のもとで蛋白質化学を学ばれ、昭和27年の御卒業後も同研究室で大学院時代を過ごされました。その後、九州大学医学部、ならびに大阪大学医学部で助手を務められた後、米国オレゴン大学に客員準教授として留学をされました(昭和39年~41年)。先生は、ここで、ストライジンガー教授と共同でT4リゾチームの系を用いて、フレームシフト変異の存在を蛋白質化学により、世界ではじめて実証されました。このお仕事は、遺伝子暗号(genetic code)の解明に直接貢献された故に極めて有名ですが、セントラルドグマの生化学的実証に参加なさったこの期を境に、当時黎明期にあった分子生物学に本格的に身を投じられることとなりました。帰国された後は、新設の植物ウイルス研究所において、タバコモザイクウイルス(TMV)の研究に着手されましたが、このウイルスは、先生が今日に至るまで、その再構成の機構から遺伝子構造、複製機構等といった幅広い視点から研究対象とされる重要な材料系となります。

私は、岡田先生が東大に着任された時に、学部3年生で、大学紛争後のまだまだ殺伐としたキャンパスの中におりました。分子生物学という新しく激しい潮流にひかれて先生のもとにおしかけ

た多数の学生の一人であり、それ以来、ずっとお世話になってきました。

先生は、セミナーでの院生や学生の研究発表等ではたいへんに厳しく、安直な説明や、中途半端なDATAではなかなか納得されず、たいへんがんこな化学者としての面を常にもたれていらっしゃいました。その一方で、分子生物学的思考に徹していらして、極めて演繹的でありながら、凡人にとっては思いもかけぬ大胆な発想をされ、驚かされることがしばしばありました。また先生は、できるだけ研究室に居られる時間をたいせつにされ、我々と討論をして下さったばかりでなく、一旦研究からはなれば、くだけた話もして下さるやさしさと、親しみやすさもおもちでした。「岡田先生は相かわらずおっかないかい」などと後輩に声をかけながら訪ねてくる卒業生が、機会あるごとに先生のまわりに集まり、たのしくさわいだことが思い出されます。

岡田先生は、数年前よりTMVのゲノムRNAを一旦DNAにおきかえたものをin vitro DNA組換えの技法で改変し、それを転写させて得た産物を植物に導入することにより変異体TMVを得るという画期的な方法を開発され、ウイルス遺伝子の機能の新しい解析法とTMVのベクター化への道を切り開かれました。御退官後は、帝京大学理工学部でひきつづき御研究を続けられるとお聞きして居りますが「まだ解析の進んでいない変異体ウイルスを使っておもしろいこと。じめるよ。」とおっしゃられる先生が、新しい夢に向けて御活躍されることをお祈りすると共に、今後とも私共の御指導をお願い申し上げる次第です。

## 在職18年を振り返って

飯野 徹 雄（植物学教室）

理学部教授としての勤めを了え退官するに当たり、まず、理学部の温かい雰囲気の中で楽しく教育、研究に終始できたことにつき、学部関係者の皆様にお礼を申し上げたい。

18年前に、住み慣れた国立遺伝学研究所からの配置換えが決まった時には、卒業した母校に戻るとはいえ、一抹の緊張を感じていた。それは一つには、研究に専念していた状態から、教育と研究という二本建ての職務に移ることになり、果して教育の任が十分に果たせるだろうかという不安を抱いたためであり、もう一つは、学園紛争での大学教官の大変な様子を聞かされていたので、一応紛争が治まったとはいえ、応微研等のくすぶりが続いている状態で、紛争に免疫のない私がうまく対処してゆけるのかと気遣ったためだった。しかし私を迎えてくれたのは、予想以上に平静な学部教室の雰囲気だった。そしてスタッフや学生たちの勉学にたいする真面目な態度にほっとしたものだ。

私は昭和26年に理学部植物学教室を卒業して一年余りで、大学院生活の半ばに国立研究所へ就職した。当時は第二次世界大戦後の再建時代で、教室では学生も含めて体制改革の議論が日々続けられていた。それに食傷気味になっていた私は、大学を離れることに一種の安堵感を抱いたものである。そして私が教授として再び大学にもどった時期は、いうなれば学園紛争後の再建期に当たっていた。しかし、同じ再建の時代ではあっても、前者は外からの統制による秩序から解放された時代であり、後者は内部的混乱への倦怠感から、自律的秩序を求めた時期であったといえるだろう。そうした時期にいわば学園紛争の戦後派として大学に戻り、落ち着いた学園生活を過ごすことができたのは、私にとって非常な幸せだった。この雰

気は私の在任中多少の波乱をふくみつつも持続し、現在にまで及んでいるように思われる。

東大に赴任してみると、実際に私が感じたショックは、そうした事柄とは別の所にあった。それは、小規模の文部省直轄研究所という機構の中から、巨大な総合大学という機構の中へ移ったことによる、運営上のギャップだった。直轄研の研究部長として、所内の意見を一段階の話し合いで取りまとめ、文部省に電話一本で掛け合っていた事柄が、東大に移ると先ず教室レベル、ついで学部レベルの審議を経、さらに全学レベルに持ち上げられ、それぞれの段階で選別や調整が加えられ、しばしば本来の意図が薄められ、多大の時間を費やして文部省の担当官にまで到達する。当初はそうしたルールを知らずに行動して、当時の事務長から注意を受けたり、戦艦大和のようなものでやがて沈没するぞとうそぶいて、先輩からたしなめられたりしたものである。こうした想いは、昭和51年から52年にかけて総合大学院問題専門委員会の生命科学小委員会委員として、また昭和54年度に総長補佐として大学院と付置研究所の問題を担当した際にも強く感じた。いわば巨大機構相手のじれったさのようなものである。

18年をへて振り返ると、東大のような重層化した機構のもとでは、そうした方式がかえって全体の能率化につながる場合が多く、いわゆる常識的な判断を下すには適していると、いつの間にか納得し、自分でもその方式に沿って行動する様になっていた。環境への有効な対応のための順応性の発露ともみられるが、一面では慣れによる批判精神の麻痺を反映するものかと自戒している。

そうした情況にあったとは言いながら、懸案だった遺伝子実験施設の創設が、私の在任中に小規模ながら達成されたのは、やはり東大を背景にし

て可能であった事であり、ことに理学部のスタッフの皆様の絶大なご支援によりはじめて行いえたものと深く感謝している。また大学院重点大学構想の議論が現在の状態にまで盛り上がり、持続し

ているのも、東大としては目を見張るべき事である。火付け役ともいえる理学部が、計画実現のために是非とも頑張るべきものと期待している。

## 飯野徹雄先生のご退官によせて

鈴木秀穂（植物学教室）

飯野徹雄先生は、本年3月を以て停年退官されることになりました。先生は、昭和26年東京大学理学部植物学科を卒業され、続いて大学院に進まれましたが、翌年9月に国立遺伝学研究所に研究員として赴任されました。それから2年余り後、米国ウィスコンシン大学大学院に留学され、昭和33年に ph. D., 帰国後3年程して理学博士の学位を受けられました。その頃国立遺伝学研究所に新設された微生物遺伝部で研究室を主宰され、昭和40年に微生物遺伝部長に昇進されました。昭和46年に東京大学理学部教授として植物学教室に戻られ、遺伝学研究室を担当してこられました。

これまで36年余りの飯野先生の研究生活は、国立遺伝学研究所と東京大学と丁度半々になりますが、その間米国留学前を除いて、一貫して細菌鞭毛の研究に打ち込んでこられました。遺伝学徒として出発されたばかりの先生は、特に遺伝子の変異性に興味を抱かれたようですが、サルモネラ菌の鞭毛相変異の遺伝機構を研究課題として、当時ウィスコンシン大学の J. Lederberg 博士の下への留学が実現したことから細菌鞭毛の研究が始まったようです。鞭毛変異というのは、ひとつの細菌系統の鞭毛に抗原性によってⅠ相とⅡ相として区別される2型があって、それが $10^3$ 世代に1回くらいの頻度で交互に変換する現象です。1個の細菌細胞はどちらか一方の鞭毛相を現わしていますが、分裂増殖を繰り返すうちに反対の相の鞭毛を生やした細胞が現われてきます。先生はこの現象を遺伝子レベルで解析され、はじめて相変異機構の基本的な図式を提出されました。ひとつの

研究対象が研究者の興味を掻き立てるさまざまな問題を内包していることはよくあることですが、鞭毛は生体構造形成のモデル系としても特異な系を提供し、先生の研究は鞭毛多型や鞭毛形成の遺伝学的解析を基礎に巾広く展開しました。その成果は、生体構造の分子構築や形態形成に基礎的な研究業績となりました。鞭毛を対象とした先駆的な業績によって、先生は昭和39年に日本遺伝学会賞、昭和48年に朝日賞を受賞されました。

先生は、学生も含めて研究に携わる者ひとりひとりの特性を尊重されました。こんなことは当然のことと思われるかもしれませんが、特記する程徹底していたようです。一見、研究室の構成員がそれぞれ全く独立の研究プロジェクトを進めているように見え、外部の人から、飯野先生は一体何をしようと考えていられるのかと聞かれることもありました。

先生は、また、さまざまな用務を引き受けられて忙しい日々を過されました。学内では、各種の主任、委員長等のほか、植物園長、遺伝子実験施設長を歴任されました。遺伝子実験施設の設立とその初代施設長として施設の運営を軌道に乗せることに盡力されました。学外では、文部省学術国際局科学官他多くの委員会の委員や委員長を歴任され、その多忙ぶりは驚異という程に見受けられました。先生は、実に頭の切換えの敏速な方でしたので、たくさんの用務を次々に処理する能力に長けていられたのでしょう。特に、遺伝子操作に関して社会的な問題が提起されたとき、日本学術会議や学術審議会の組換えDNA関係の委員会・

部会などを通じて、組換えDNA実験指針の策定に参画され、我が国の組換えDNA実験を推進する基礎作りに貢献されました。

已年の蛇足をつけ加えさせていただきますと、先生は密かにフクロウの民俗史を研究されています。

退官後は、早稲田大学で教育・研究を続けられると伺っております。お元気で活躍を続けられ、フクロウの研究を完成されることを願ってお送り致します。

## 退職にあたって

星 圭介（事務部）

この春で丁度13年間を理学部で過ごしたことになります。農学部演習林を振り出しに、東大の一員として、今日まで人生を送ってこられたのは多くの人々に暖く接して頂いた賜と心から感謝して居ります。理学部での数多い思い出や、心痛む事やら、幾多の経験を経て、自分なりに仕事を果した積りです。構内の三四郎池のほとりの木立の四季を眺めては、この林相が〇〇演習林の何林班にあった樹木によく似ていると、自分なりに解釈して、葉脈やら、木のおいなど胸一杯に吸いこんでは、これは何々と自分なりに診断する。演習林のある先生と秩父の山奥で一夜を伴にした時、先生は君達、不満があった場合、この山奥で、木を

枕にして、大の字に寝たまえ、この山が俺一人で動かすことが出来るとさとした場合、天下をとった気持ちになる。これが最高だ。この先生の話も若い頃は別に深く考えなかったが、山を愛し、林を愛した先生の長い体験から、若い吾々にそう話して下さった事が今更ながら思い出される。

あと2ヶ月で東大を去る私ですが、多くの先生方や職員の皆様に公私に亘り、親しく接して頂きました。お陰様で大過なく勤めを終えて退官いたしますことが出来て厚くお礼申し上げます。

理学部の益々の御発展と諸先生、職員の皆様の御健康を祈念して退職の御挨拶といたします。

## 星 圭介氏を送る言葉

土 居 喜 公（事務部）

今年もまた定年退官をされる方々をお送りする時節となりましたが、わが理学部においても給与掛長星圭介氏がめでたく退官されることになりました。

星さんは、昭和21年5月6日付で本学農学部附属演習林に奉職され、その後昭和41年10月1日付で用度掛長に昇位、次いで昭和51年4月1日付で理学部給与掛長に配置換となり、現在に至りました。その間42年10箇月余の永きに亘って東京大学における事務部門の一員として自己の職責を全うされたことに深く敬意を表すものであります。

当理学部においては、満13年間給与掛長として給与・共済・福祉関係事務の責任者としての責務に専念されました。

当学部は教職員数約550名の学内屈指の大部局のため、その事務処理は複雑多様を極め、給与掛での13年間は人間関係も含めて苦勞の連続であったであろうことは十分に察することができます。星さんはそれを克服しながら専心業務に励まれたわけで、吾々後輩にとり尊敬の念で一杯であります。

仕事を離れた日常の星さんは、昼休みは連日将

棋に興じ、また自分の息子や娘の様な職員に対しては好々爺の様に接する光景を屢々見受けられました。

どうか退職されてもお暇の折には理学部をお訪ねいただき、その温厚な顔で吾々後輩に対して人

生経験に基づく貴重なお話でもお聴かせ願いたいと思っております。

どうも永い間ご苦労さまでした。益々の御健勝をお祈りいたします。

## お別れの御挨拶

長 田 美 子 (動物学教室)

教室の片隅に白ペンキで昭和27年実動機…と書かれた木製の棚があります。私が教室で初めて書き込んだ備品番号、それがこんなに古びてたゞ置かれているのを見ると改めて37年の歳月の長さを思います。

もしかしたら動物園のようにいろいろな動物がいるのかしらと、動物好きの私が胸を躍らせて教室に足を踏み入れたのは、敗戦後、日本の社会、経済が漸く立ち直り始めた昭和27年の春でした。

郵便の出し方も知らず、給料がいくらかも、税金を納めなければならない事も、公務員と云うものになった事すら知らずに勤め始めた私でした。1年目の教室の予算は150万円、ものすごいお金だな、と目を見張った事が懐かしく思い出されます。昭和32年の物品管理の大改正が私が意識して始めての大仕事でした。明治11年以来の備品の帳簿と、その時点での教室のすべての備品を対照して、新しい備品の分類表によって物品供用簿を作成すると云う作業でしたが、教室全員の方々の御協力によって暑い夏の日にようやく終わった時の嬉しさも忘れられない事の一つでした。そしてこの頃から私に教室の一員としての意識が出て来たような気がいたします。その後、何回かの動物学会の大会、そして国際会議のお手伝い等々、変化の無い繰返しの様な日常の中にもイベントと云うべきものがあり、楽しい日々でした。

昭和52・53年の2号館改装のための1号館への引越し、そして長年の3階ずまいから1階への住み替え、ここ10年程は窓の外の櫺に四季の移り変

りを見、青空を仰いで好きな山を想い、と云う自然に恵まれた窓辺でした。

37年の間に日本は驚異の経済発展を遂げ、オリンピック、安保闘争、大学紛争等々、多くの事がありました。教室も講座がふえましたし、先生方も変わりました。事務室の仕事の内容も、その量も時の流れと共に激しく変わりました。そして驚くべき事には10年程前からコンピューター時代が到来し、機械によって事務処理が行なわれるようになったのです。私が仕事を始めた頃には500枚でも1,000枚でも封筒の宛名を書きました。又、騰写板で何千枚もの印刷物を刷った事を思い出します。30年程前の複写機の出現も画期的な事でしたが、現在ではコピーがないと仕事が進まないようになりました。コンピューターも近い将来、無ければ大学の事務機構が動かないと云う日が来る事でしょう。今、私は“老兵は消え去るのみ”と云う心境ですが、又一方では、自分の手で字を書き、一つ一つ手作りの事務をして来た事に少しの満足感を味わっております。私にとっては本当に良い時機に職場を去る事が出来るのだなと心から思います。

最後にこの37年間、楽しく、充実した日を過ごさせて下さった動物学教室の先生方、同僚の皆様方に心からの御礼を申し上げます。そして又、いつもお助けいただいた理学部事務室、他教室の事務室の皆様方にもたいへんお世話様になり、本当に有難うございました。

平成の時代を迎え、更に21世紀にはいって、理

学部が大きく飛躍する事をお祈りしてお別れの御挨拶といたします。

\* \* \*

(主任の嶋先生が送る言葉を書いて下さるとおっ

しゃいしましたが、おいそがしい先生の時間をおさき頂くのは申し訳ないので御辞退いたしました。)

(上のような次第につき、執筆できません。嶋)

## 定年退官に際して

甲斐正人(植物園)

とき、恰も昭和という長い時代が幕を閉じ、平成という新しい時代を迎えた今年の1月、戦争と平和、苦難と繁栄の激動の時代と共に生きてきた私ですが、この昭和という年代に終止符が打れて、まもなく3月末をもって定年退職という、また一つの出来事が控えています。実感としてはまだピンときませんが、その日が確実に迫っています。一方では退官に対する対応があり、片方では現実の業務の処理の仕方があり、複雑な心境の今日此の頃です。

長かった昭和の時代も一歩その枠から抜け出してみると、色々な出来事がより鮮明に見えてくるような錯覚を覚えるのは、私一人でしょうか。私が東大という枠の中で仕事をするようになって、かれこれ33年余、その中で最も長期に亘って、お世話になったのは植物園であります。植物園には1962年以来、約27年余在職しましたが、当時はまだ戦後の復興の遅れが目立ち、随所にその面影を見ることができました。特に温室の復興が殊の外、遅れていた感じがしました。しかし、先輩諸氏の努力のお陰で今は全く、その面影を見ることはできません。こうした推移のなかで着実に時代は前進しています。今後ますます多様化する、自然環

境の悪化、それに伴う植物社会、これらに対応するためには、日本の植物園の基盤はあまりにも弱いものがあります。野性植物あるいは遺伝子資源の確保が叫ばれて久しいが、保存するにもその施設が貧弱である。当面、専門的には「プロパゲーション・エリア(増殖保存区画)」という施設など急務を用するものがあるが、財政難に加えて人材難が慢性的な日本の植物園が、これからの問題点をいかに克服していくかが、今後の課題ではないでしょうか。特に人材については若手技術者が能力を十分発揮できるような環境整備を中心に育成することが必要でしょう。幸い資源植物の保全あるいは保存については、国際的な協力体制が確立されつつあり、着々進んでいるのが現状で、今後は受け入れ枠の拡大が望まれる所以であろうかと思えます。

最後に長い間、お世話になりました。植物園の方々をはじめ理学部の皆様方に対して感謝申し上げますと共に、植物園の益々のご発展を祈念しつつ、お礼の言葉とさせていただきます。

1989年1月20日 記

## 宮崎敏夫さんの定年退職を惜しんで

酒 井 彦 一 (生物化学教室)

昭和54年の12月に、それまで理学部3号館のボイラー技師だった笹原さんの後任として宮崎敏夫さんが3号館に初めて来られたときは、随分穏やかな人だなあという第一印象を持ったことを覚えています。これは10年経った今でも変わっていません。東京美化株式会社の業務部技術課から東京大学理学部に移られた敏夫さんは、12月から3月迄の冬期は3号館のボイラー技師として地下室のボイラー運転とその維持管理に努力され、3号館の縁の下の力持ち的存在でした。10年間、暖房に関しては3号館のどの部屋からも苦情が無かったのは、ボイラーの管理に敏夫さんが如何に細心の注意を払っておられたかをうかがわせるものです。大変ご苦勞様でした。3号館の皆さまに代って厚くお礼を申し上げます。

ボイラーの仕事の合間を含め、4月から11月の期間は、生物化学教室の郵便物の処理や、講義室、会議室の整備に欠かせない人でした。それとともに、3号館の全ての人たちが恩恵を蒙っていたのは、廊下や居室のタイル修理や蛍光灯の取替え、細かな電気修理、モーター管理、3号館周囲の清掃など、数え切れないものがあります。

敏夫さんは、また、自然を友とする豊かな心をもっておいでです。それとなく3号館の周りに花があり、木が植えられ、ゆとりを与えてくれます。或る日、3号館の東側非常口脇の、通称敏夫花壇

に芙蓉が咲き誇っているのを眺めて、その手入れの良さに感じ入ったものです。これは3号館のなかで廊下のタイルの破損が、それとなく、いつの間にか修理されていることと一脈合い通ずるものがあります。また、同じ職場の中で、配置転換で出入りする仲間の歓送会や歓迎会では、終始寡黙ながらもごやかな雰囲気を絶やしません。その誠実で、責任感の強さが、ボイラーという縁の下の力を生み出しているものと推察しています。

最後に、敏夫さんが如何に勤勉家であるかを御紹介したいと思います。敏夫さんは昭和52年に二級ボイラー技師免許を取得しましたが、その後研鑽を重ね、60年に一級ボイラー技師免許を取得しました。更に、3年後に、東京都三級公害防止管理者の資格とともに、危険物取扱者乙種の免状を取得するなど、大変な努力家です。家庭は奥様と息子さんが二人で、敏夫さん自身は大の小鳥好きで、“ピーちゃん”が容体が少しでも悪いと、“入院”させる愛鳥家と聞いています。このように自然を楽しむ敏夫さんには、これからは益々自然に親しむ機会が多くなるのではないのでしょうか、また、それを願っています。ただ、3号館住人一同としては、この4月から敏夫さんの姿が3号館で見られなくなるのは残念でなりません。どうも長い間ご苦勞様でした。

## 梅村さんを送るにあたって

武 田 弘 (鉱物学教室)

梅村さんが鉱物学教室に来られたのは、教室が理学部2号館から5号館に引越して来たばかりの時でしたので、5号館に於ける10年間の昭和時代

の教室の面倒を見ていただいたこととなります。引越し後のドタバタ騒ぎはまだ終ってなく、新しく一緒になった数学・地質・鉱物の三教室と、5

号館の清掃の問題、戸の開閉、郵便の差し出し・受取り、きれいな飲料水の確保等、新しいシステム作りに仕事を始めたばかりのときでしたから大変な御苦勞であったと感謝しております。梅村さんのお陰でこの10年間、教室の日常生活が非常にスムーズに進み、何一つ問題らしい問題が起きませんでした。専任の秘書の居ない小教室である鉱物学教室では、事務の長谷川さんと共に梅村さんに、その仕事のかなりの部分をお手伝いいただいたこととなります。梅村さんのご退官は今後の教室の上記の機能の停止を意味します。といたしますのも人事委員会の特別の配慮のないかぎり定員削減で用務員の補充は困難であるからです。昭和時代の終りとともに何十年も続いた便利で快適であった今までの生活様式は姿を変えることとなります。ここにそれがどのようなものであったか、梅村さんのお人柄とともに記録に留めておくことは有意義かと思えます。

私の知る限りでは梅村さんは戦中戦後を通じて4代目で、先任の岡本つちのさんは明治女性の典型とも思える人でしたが、梅村さんも昭和の良き時代を代表するような印象を与える女性です。文字通り昭和の63年間をきっちり生きて来られた方です。まだお会いになっておられない方には、これも昭和を代表する女性である高峰秀子と佐久間良子を思いださせるいつも笑顔を絶やさない温和な人と紹介しておきましょう。朝早くからきちんと仕事を始められ、我々が仕事を始める頃には教室中きれいに掃除がおわっており、おいてあった物の位置が変わっていないため、いつの間にか塵だけが消えた印象をもってしまいう位です。殺風景な教室の中であって梅村さんの部屋には世話の行届いた植木鉢が置かれて教室のメンバーにとって、まさに砂漠の中のオアシスでした。ある教官が長期海外出張の時に、彼の部屋の観音竹の世話を梅村さんにお願ひしました。それまでは息も絶え絶え辛うじて緑を保っていた観音竹が、三カ月後にはこれがあの観音竹かと思える程に生き生きと蘇っておりました。残念ながら、また一カ月のちに

は元の姿に戻ってしまいました。

鉱物学教室の基礎を築かれた先生方が英国留学されていた関係もあり、教室では3時から「お茶の時間」があります。教室事務の連絡や討論・文明論議がずっと何十年も続いています。その際の潤滑油である紅茶も定時に欠かさず準備してくださり、教室の円滑な運営に貢献しております。少ない予算で何年も値上げがなく同じ品質の紅茶が出てくるのは当教室の不思議の一つです。

日常研究活動で大切なことは、国内外の研究者との手紙による交流ですが、これも全ての記録が取られ間違いなく先方に届いているのも、あたりまえのように見えますが大変な御苦勞であると感謝しております。特に私は郵便物の多い方で、国際共同研究、国内・国際誌の編集、論文の投稿等、時間を競う郵便物の差し出しで、梅村さんの帰宅前の忙しい時にご迷惑を掛け恐縮しています。5号館は理学部事務から最も遠い所にあるので、締切日ぎりぎりの書類を持参していただいてセーフであった経験を教室員皆が何度もしております。

これら教室の雑用の全てをスムーズにこなして下さっている恩恵は、昭和63年度の終りと共に昭和の昔話になってしまいます。これから何時も不便を感じる時には、梅村さんを思いだして、陰ながらお世話になっていたことを、思いだす事が多い日々となると思われます。日本の大学は、そうでなくても雑用が多いのに一率な定員削減でますます海外との差が大きくなるのは本当に困ったことです。今まで梅村さんの存在で研究がスムーズに進んだことを、この機会にあらためて感謝したいと思ひます。梅村さんにはご退官後、健康で有意義な人生を送られますことを教室一同心からお祈りいたします。

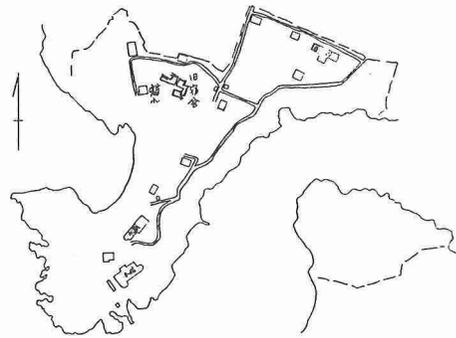
## 石渡綾子さんを送る

小 牧 総江子（臨海実験所）

石渡さん通称綾ちゃん（水族館を公開していた頃は若い女の子が数人いて、先生以外の職員は、男はさん、女はちゃんづけだったそうです）は、終戦後の昭和25年5月31日付で辞令をもらい、以来39年という長きに亘って実験所のために用務という隠れた大変な仕事一筋に尽していらっしゃいました。その間、実験所を訪れた学生・研究者は今ではそれぞれの分野の第一線に立って活躍されており、皆をみてきた綾ちゃんとしては目を細める思いだと思います。

綾ちゃんの仕事は朝は実験所本館の掃除から始まります。昭和46年迄は数人で手分けをして会議室の壁板まで拭く程でした。一服してから宿舎（昭和50年迄は明治時代の木造建築）に上がり清掃、これが又大変で、はたき、箒、バケツ、雑巾を使い畳の部屋、長い廊下、離れ、便所（勿論水洗でない上に手洗いの水道もついていない）をきれいにした後、宿泊者の使ったシーツ、枕カバー、寝巻等の洗濯までしたそうです。今でこそ全自動洗濯機を使っているものの、当時は盥、洗濯板、固型石鹼でゴシゴシと手洗いをしなければならずさぞ大変だったろうと思います。それが済むと教官宿泊部屋の布団敷、その間水族館の忙しい時代には昼食時の交替の切符切りの手伝もしたといいます。四時半になると、再び下に降りて来て水族館の掃除の手伝をして、五時過ぎに皆一緒に帰路につくという毎日だった様です。土・日・祭日は休みなしで昭和45年頃迄は土・祭日の代休は全くもらえず、その後土曜半日と日曜日の代休を平日にもらえる様になったらしい。綾ちゃんの代休は火曜日の午後から水曜日で、私がここにお世話になってからは水曜日は家で休養をとりなさいといわんばかりに雨の日がとても多かったと記憶しています。46年9月1日には水族館が閉館となり、

その掃除はなくなった。51年には新宿舎が完成し、電化の恩恵を被る様になった。とはいえ用務の仕事をするのは綾ちゃんだけになり、臨海実習時にはやはり大変な事だと思います。現在では朝は7時過ぎには出勤し、実験所本館の掃除を一手に引き受けています。それをこなし、宿舎に上がり掃除、洗濯と一日中休みなく働き、気候に合せた布団替えの気配りや、冬でも蚊が出る様なところなので殺虫対策など、長く勤めあげた職員でなくては出来ないことをしっかりやって下さっています。今、綾ちゃんは半生をこの実験所に捧げ輝かしく退こうとしています。後任もとれないまゝ綾ちゃんに今辞められてしまったら、7万6千平方メートルの土地にちらばっている実験所の管理はどうなるのでしょうか。本館はもとより、宿舎は荒れてしまうのではないかと大変不安です。



こゝで綾ちゃんの人となりにちょっと触れてみたいと思います。とてもタフで働き者であることはおわかりいただけたと思います。そればかりでなく頭の方も働き者で、とても記憶力がよく、実験所の古い出来事や来所者の事ならまず綾ちゃんに聞いてみたらという程です。また、絶対に公私混同をしないことや、曲ったことが大嫌いで、そんな時には誰にでもぶつかって行く程です。お説教をされたり怒られたりした職員や学生は何人も

いるのではないのでしょうか。また、人情に厚く所内の困った人に朝晩2ヶ月も食糧を車で運び続けたり、長野に行って来たといっちは所員に抱えきれない程のリンゴやナシをお土産に下さったり、気持の大きい親分肌の方です。

女手一つで御息を育て上げ、父母を看取り、

家を新築し、今では御息と娘の様なお嫁さん、それに10匹余の犬猫に囲まれ、とてもお幸せそうです。実験所を去られた後もどうか健康に気をつけて、開放された自由な時間に向って羽ばたいて下さい。

## 定年退職に際して

中 田 賢 次 (化学教室)

永い間理学部の勤務の中で、御指導を戴きました先生方、またいろいろと御世話になりました職員の皆様に、理学部を去るにあたり、理学部広報第4号の場をお借りして御礼申し上げます。

昭和22年3月に理学部化学教室木村研究室に研究室職員として採用されました。木村研究室での最初の仕事は、技官の方が退職するので、その方の仕事を大至急習得するようにとの仰せでありました。その仕事とは、ロンドンのアダムヒルガー社製E<sub>2</sub>型石英分光写真器を使って、発光分光分析を行う事でした。この分光写真器は、備品台帳によれば、大正3年2月2日に柴田雄次先生が購入されたもので、当時では、貴重な分光写真器でありました。標準試料を使って10日間ほどの特訓で、各種元素の永存線が、正しく読めるようになり、うれしくてたまりませんでした。そして発光分光分析に自信を持ちました。当時は、この分光写真器を使って吸収スペクトルの測定もやっておりました。試料溶液をベリー管(中空の内管を調節して液層を加減するもの)に入れるだけで簡単に分析が行えました。この分光写真器は、昭和50年まで使っておりましたが、私にとっては大変思い出の深いお品でした。

またほかに、岩石の全分析を習得するようにとの事でした。地質学教室の久野久先生より戴きました岩石を、全分析するのですが、その頃は薬品のきれいなものが少なく大変に困りました。塩酸や硝酸は蒸溜し、精製できるものは精製して使い

ました。また都市ガスの火力が弱くて電気炉でルツボを焼いたり、ピーカーの溶液は電気コンロで加熱しました。そのほかガラス器具が粗悪で、うすいアルカリ性の溶液でくもりガラスになったり、加熱中にすぐに割れてしまうなど、苦労の連続でした。これらの事は、強く思い出として残っております。またチタンやマンガンの比色分析には、デュボスク比色計を使っている頃でもありました。

28年間おりました、木村健二郎先生、斎藤信房先生の両研究室、並びに、富永健教授に御指導とお世話になりました事を心から感謝致しております。ありがとうございました。

昭和50年10月から斎藤研究室から薬品室へと移りました。ここでは、危険物取扱者として、薬品の管理はもちろんですが、実験廃液の管理も大切な仕事です。その頃は、環境安全センターの御指導のもとで、実験廃液の回収を行なって戴いておりましたが、その廃液の中でハロゲン系廃液剤が時として石油缶に穴をあけてしまうとかお聞きして、もしかしたら御迷惑をおかけしたのではないかと思っております。まもなくして各学部にも部局廃液倉庫ができました。廃液を入れるためのポリ容器が貸与になり、その廃液倉庫の担当官を仰せつかりまして、理学部(生物化学教室を除く)の実験廃液のお世話が始められました。お蔭様で、皆様のお力添えで12月14日で445回を数える事ができました。環境安全センター発足当初から運営委員をされておられて、環境安全センター長でお

れる稲本直樹教授に永い間大変お世話になりました。ありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

つぎに建物について、化学教室は、それまでありました旧館・本館に続いて新館が昭和58年に建ちました。この新館は16カ月の工期を終えて地上7階、地下1階、延床面積3,880 m<sup>2</sup>の規模で、実験室、研究室として、また危険物取扱最大数量30,358倍が取り扱える一般取扱所として申し分のない立派な規模の建物です。この化学新館で副危険物取扱者になっておりますが、保安監督者でおられます田隅三生教授に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。また退職に際しまして、大変お世話になりました増田彰正教授に厚く御礼申し上げます。植物学教室鈴木美和子事務室主任、生物化学教室宮崎節子事務室主任お世話になりま

した御礼申し上げます。安全委員会などでお世話になりました化学教室の田上多佳子事務主任、平尾宣子事務室主任をはじめとする皆様、そして理学部事務室の皆様にご心から御礼申し上げます。また学生実験でお世話になりました杉浦技官にも感謝申し上げます。最後に、ビル管法で義務づけられている飲料水中の残留塩素の測定では、毎日行われ本館で梅津恒技官、新館で杉本瑛さん、液体窒素およびドライアイスでお世話くださっている岡本實さんには大変お世話になりました。ありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

光陰矢の如し、はやくも42年たちました。永い間大変お世話になりました。ありがとうございます。これからも若さを失わずにすごしたいと思っております。

## 中田賢次さんを送る

富 永 健（化学教室）

中田賢次さんは、昭和22年春、理学部化学教室木村研究室の職員になられてから、この3月末で定年退官されるまで、42年もの長い間化学教室に勤務され、技官（教務員）として、また昭和63年からは助手として教室のために大きな貢献を果たされた。

木村研究室では、主に発光分光分析を担当して地球化学試料の分析など、故木村健二郎教授の研究を補助された。ついで斎藤研究室においても、分光分析や放射能分析などに従事されるとともに、昭和38年以降は学部学生の無機化学・分析化学実験において、中田さんは岩石の全分析や、とくに分光実験に助言と指導を行われた。この間に実験室で中田さんのお世話になった化学科出身者は、おそらく1,000名をこえるものと思われる。昭和50年に斎藤研究室から化学教室の薬品室に移られ、化学薬品などの管理を担当し、教室の研究活動を支える蔭の力として大変重要な役割を果たして来

られた。昭和59年には日本分析化学会の有功賞を受けておられる。さらに、危険物取扱者、水質管理責任者、都公害防止管理者、防火管理者などの資格をつぎつぎに取得され、危険な薬品や溶媒の管理、実験廃液の回収など安全・環境面で幅広く、化学教室のみならず理学部としても中田さんのお世話になるところが大であった。中田さんは温厚で控え目なお人柄であるが、仕事に関しては積極的に責任感が強く細心な方であり、教室が安全管理の面で永らく無事に過ごせたのも、ひとえにこのような中田さんの御尽力のおかげである。

中田さんは若いときから長く教室に居られたので、戦後間もない頃から今日までの教室のいろいろな事情に通じておられ、教室出身のわれわれの大先輩の学生時代のエピソードなどを折にふれて伺ったものである。筆者の個人的な関りで恐縮であるが、私自身の中田さんとの出会いは、昭和32年の冬、卒業研究について斎藤信房教授からいた

だいた試料（イオン交換樹脂に吸着した錯体）が中田さんの調製されたものであったと記憶する。以来昭和50年まで同じ研究室のスタッフとしておつき合いいただき、またその後私が研究室を主宰してからも経理その他いろいろな面で中田さんの助力を仰いだものである。

永年、教室のすべての人々から信頼され、親しまれた中田賢次さんが此度退官されることは、教

室にとって誠に残念なことであり、大きな損失である。また、中田さんが退職されると、教室の「ふるき良き時代」を知る人がいなくなることも大変淋しいことである。40有余年に及ぶ化学教室への献身に対し、お世話になった多数の関係者にかわって心から御礼申し上げ、また中田さんが今後ますますお元気で、充実した新たな人生を楽しまれるよう心からお祈り申し上げたい。

## 原村寛氏 — 岩石・鉱物の分析一筋に30年

久 城 育 夫（地質学教室）

原村寛氏は、昭和26年に東京工業大学内財団法人工業振興会に勤務すると同時に同大学の分析化学教室の岩崎研究室の研究生となられた。昭和35年4月、東大理学部（地質学教室）に技術員として着任され、同年11月に教務員、38年に文部技官教務職員、そして63年10月に文部教官助手になられた。

東工大分析化学教室においては岩崎岩次教授および桂敬教授より指導を受けられ化学分析の技術を修得された。昭和35年に東大理学部に着任されて以来、29年間にわたって数多くの岩石、鉱物の化学分析を行い、地質学教室の研究活動に非常に大きな寄与をされた。本理学部に着任される数年前から既に東工大において、地質学教室から依頼された試料を分析されていたので、原村氏の実質的な寄与は30年以上に及ぶことになる。この間当地質学教室だけでなく、鉱物学教室、地震研究所や海洋研究所、および他大学の地学関係の教室からの分析の依頼にもしばしば応じられた。これまでに行った分析の総数は4,000近くにもなる。これは大変な数で並大抵では出来ないことである。すなわち、この分析数を30年間に均等に割り振ると、3日に1個の割合になる。岩石や鉱物は成分の数が多く分析に手間と時間がかかり、また試料によっては二度分析を繰り返すことを考えると、この割合は驚異的である。数だけではなくそれら

の地球科学に対する貢献度も極めて大きい。例えば世界的に有名になった故久野久教授の日本の火山岩の研究は、原村氏の分析に負う所が大きい。また、造岩鉱物の研究において地質学教室は1950年代の後期から1960年代にかけて優れた研究を数多く行なったが、それらはやはり原村氏の分析に負っている。その他、実に多くの研究に貢献され、お世話になった学生、教官は数十人に及ぶ。

これらの分析の一部はまた、原村氏御自身の研究ともなっており、共著を含めて20数篇の論文を内外の学術誌に発表されている。中でも、都城秋穂博士（現在、ニューク州立大学教授）と共同研究として行なった日本の各地質時代における堆積岩、特に頁岩の分析や隕石の分析は国の内外の研究者の貴重なデータとなっている。また、1969年にはアポロ11号による月の岩石の分析を日本で最初に行なった。翌年のアポロ12号の玄武岩の分析では、NASAのX線蛍光分析では見られなかったマグマの分化作用を見事に示すことができた。月の岩石の分析は量が少ないことに加えて、世界の一流の分析者との一種の競争でもあり神経をすり減らすことであったと推察する。

原村氏は分析技術に優れ、また大変慎重であるため同氏の分析結果は信頼性が高く、国内はもとより世界的にも高く評価されている。特に、分析が極めて困難である隕石の分析では、同氏は米国

の Smithsonian 研究所の Jarosewich や、フィンランドの地質調査所の Wiik などと共に世界でも五指に数えられる程である。最近南極において日本の観測隊が採取した多量の隕石の分析を極地研究所から依頼されて行っている。原村氏は困難な分析を好まれ、隕石の分析などには特にファイトを燃やされるようである。

2号館時代は、分析室は地下にあって薄暗く、原村氏はそこで孤独に黙々として分析を続けられていたが、5号館に移ってからは3階の本部庁舎のすぐ向かいの明るい分析室で、本部の職員の人達を眺めたり、また眺められたりして分析を行ってこられた。昭和41年11月から翌年の5月までは、アラスカ大学から招聘されて岩石の分析を行なっ

た。伺ったところによると、同氏は寒さに強いようで、摂氏零下30—40度の戸外を悠然(?)として歩いておられ周囲の人が驚いたとのことである。

原村氏は山が好きで、今も時々暇をみては山歩きに出かけておられる。先日、地質学教室のリクレーションで丹沢に登った折りには若い人達に遅れをとらなかつたそうである。定年後も元気で山歩きを存分に楽しまれることを心から願っている。今後も南極隕石の分析が続けられるとのことなので、山歩きばかりされるわけには行かないであろうが、今までよりは酸やアルカリの臭わない空気をもっと吸われる機会をつくっていただきたいと思う次第である。今後どうぞお元気で。

## こんなに狭い理学部の建物

### 理学部企画委員会建物小委員会

理学部の企画委員会建物小委員会は、二年前から理学部中央化の構想をたて、その実現に向けて、ワーキンググループによる具体案の作成や、施設部との交渉などの努力を続けてきました。その一環として、中央化の要求の基礎資料を作るために、現在の理学部の建物がいかに狭く、危険であるかを調査するアンケートを昨年実施し、皆様のご協力をいただきました。いろいろな事情でその整理が遅れていましたが、やっと形になってきましたのでその一部をご紹介しますことにしました。

図は、二号館一階の南側部分です。ここが特別に狭いというわけではなく、どこも似たようなものです。ご覧になっておわかりのように、実験装置や什器類に占領され、その狭さたるや目を覆うばかりです。

国立大学には全国一律に基準面積というものがあります。理学部は7号館ができた時点でこの基準面積に達する面積を獲得したことになっています。そうであるのに、どうしてこんなに狭いのか、その理由を少し考えてみます。

基準面積と呼ばれているものは国立学校建物必要面積基準表(昭和51年)という文書で定められていますが、この名称からもわかるように、基準面積とは本来は必要条件であって十分条件ではなかったのです。つまり、面積の下限を定めたものであったのですが、現在はこれがなぜか上限と解釈され、これを超えた面積を要求しても通らないことになっています。基準面積の決め方を紹介すると、博士課程をもつ理学部の面積算出法は〔(実験講座数+学科数)×495+(非実験講座数)×395〕㎡です。これが修士までの場合には495が445に、また395が345に変わります。博士の定員は講座あたり一名ですから三年分で三名であり、したがって一名あたりの面積は(495-445)／

3=16.7㎡です。実際に使えるのはこれの8割ほどですから約13㎡ということになります。そしてこの13㎡の半分近くが図にあるようにモノに占領され、人間が動きまわれるのはわずかに数㎡になってしまいます。博士課程の院生といえれば立派に自立した研究者であり、大学の研究活動の中心的担い手ですが、その実験装置と研究活動の場がこのように狭くては研究に支障を生じるだけでなく、研究の種類によっては大変に危険でもあります。

東大理学部が特に狭いのは、ほとんど定員一杯に博士課程の院生が在籍しているからです。ちなみに、東京大学を除く国立大学の理学研究科の博士課程の定員と実員の比は<sup>(注1)</sup>1:0.77であるのに対して東大理学部のそれは1:0.98です。この違いが理学院計画の主な理由の一つであるのはご承知のとおりです。

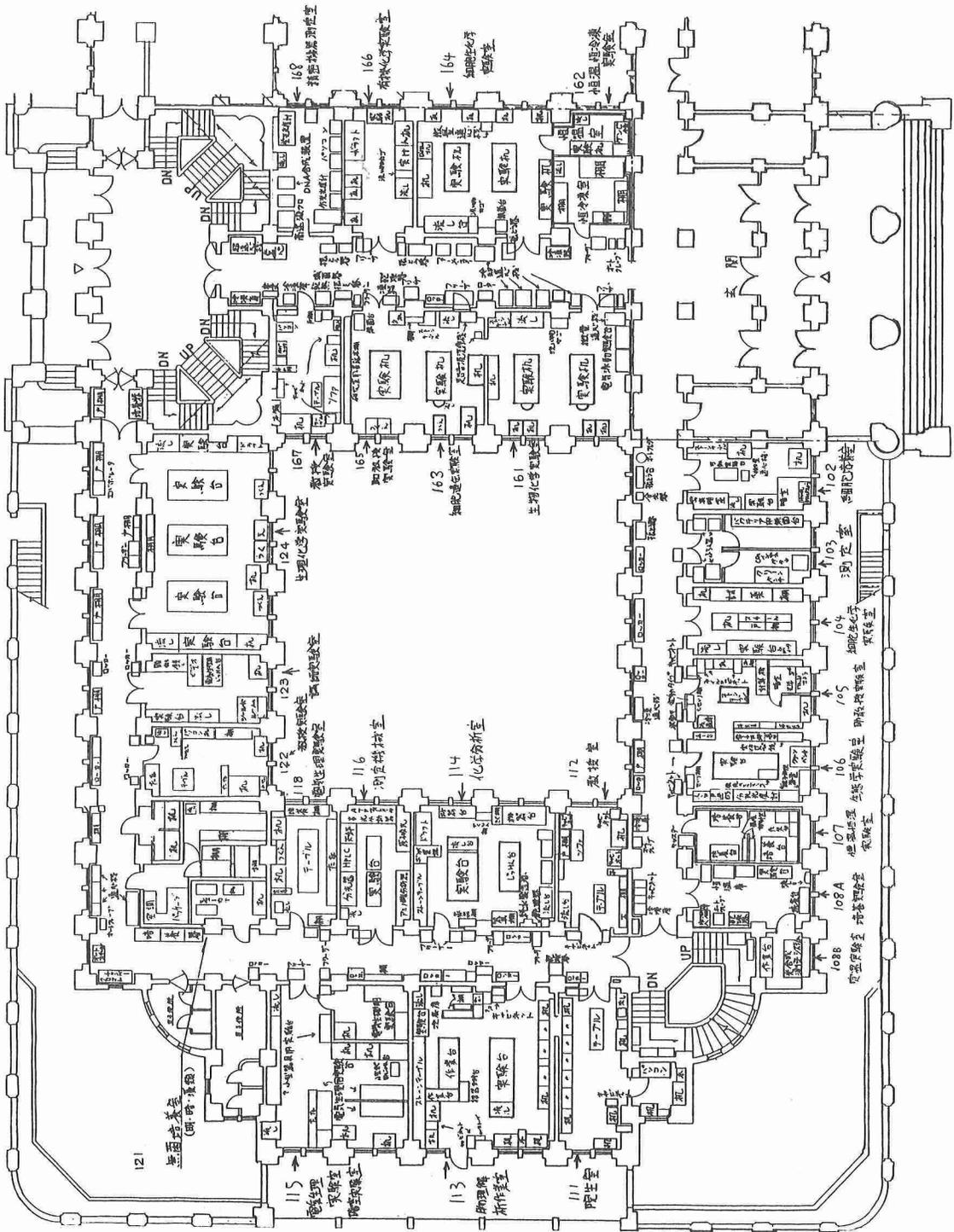
このことに加えて、狭さを加速する原因に研究設備備品の急増があります。東大の研究の優秀さの証拠として、講座あたりの科研費の獲得額は理学部の平均で年間約10,380千円<sup>(注2)</sup>ですが、これは国立大学理学部平均の5,902千円<sup>(注3)</sup>と比べて極めて高額であります。この研究費で購入された設備備品にはそれを設置すべき面積は手当てされません。したがって、モノに占領されて床面積は減る一方です。

当小委員会は、理学部中央化に際してこの狭さを解消するために、中央化達成時に面積が現在の1.3倍になるように立案をすすめています。これではもちろん基準面積を突破することになりますが、そのための方策として、一つは特殊な装置や研究手段の面積を枠外とすることを認める「基準

- 
- 注1. 東京工業大学を除く大学の平均  
2. 昭和63年度交付額  
3. 昭和63年度交付予定額

特例」を目一杯に利用すること、もう一つには  
理学院とからませて何らかの特別措置を要求する  
ことを検討しています。

当小委員会は今後も中央化に向けて最大の努力  
を続けます。理学部構成員の皆さんのご理解とご  
支援を期待します。



## 日加協力事業によるトリアムミュオンチャンネルの完成

この国際協力事業は、文部省科研費特定研究「中間子科学」（代表者、山崎敏光原子核研究所長）の最大の計画研究課題として日本側で予算化され、カナダバンクーバー市にあるトリアム研究所とほぼ半分ずつの予算分担によって、1986年度から3ヶ年計画でスタートしました。最終目的は、負のミュオンを、数 MeV もの低速で、直流状に、強力に得ようとするもので、中間子科学研究センターのKEK分室でのパルス状ミュオンと相補的な研究ファシリティをつくらうというも

永 嶺 謙 忠（中間子科学研究センター）

のであります。日本側すなわち東大側の組織は、筆者を代表者として、西山樟生・三宅康博・福地光一諸氏らセンターの職員が作業を分担しました。

トリアム研究所は、パイオンやミュオンを強力につくり出すことの出来るエネルギー 500 MeV、電流 170  $\mu$ A の陽子サイクロトロンを持ち、世界の3大「メソンファクトリー」の1つと云われています。この加速器につなげて、私共がKEK分室で10年前に開発に成功した超電導ミュオンチャンネルをつくれれば、世界最強にして、最良質の負ミ



ミュオンが得られるはずであるというのが、そもそものも動機でありました。東大側の担当は、長さ6m、直径12cm、磁場5テスラという巨大な超電導ソレノイドと、超臨界ヘリウムによる冷却システムでありました。この大型超電導ソレノイドは、筆者等によって10年前に開発されてKEK分室に設置され、これまでに2万時間に及ぶ運転実績を持つものと、ほぼ同型のものとなりました。

幸いにして、建設作業は順調に進み、昨年夏の終りには、超電導ソレノイド本体、冷却系コールドボックス、冷却系コンプレッサーなどの製作・設置が終り（写真参照）、超電導システムのテストが行なわれました。つづいて昨年9月末にはビーム発生に成功し、2MeVもの低速で、毎秒  $2 \times 10^5$ もの負ミュオンを、世界で初めて、生み出しました。12月初めには、後で上村先生が述べられるように完成記念祝典が行なわれました。

既に、テスト実験が始まっています、西山樟

生（東大中間子センター）らを中心とする高温超電導体の酸素の電子状態を偏極負ミュオンで探る実験、坂本澄彦氏（東北医大）らを中心とする、人体の骨の骨ソシウ症をミュオン原子X線で診断する実験、などに成果が上がっています。既に日本側から上記2つの実験など6つの実験が次々と行なわれることになっていますが、東大理学部からも、筆者らのミュオン触媒核融合の基礎実験の他、近藤保氏らのミュオン移行反応と中間子分子分光の実験、池畑誠一郎氏らによるポリアセチレンの負ミュオンスピン回転の実験などが承認されています。

私共中間子センターといたしましては、パルス状と直流状と2つのミュオンビームをうまく使いわけながら、ミュオンの科学を強力に進めてゆきたいと考えております。少しでも御関心のある方の参加を強く観迎致します。

## ミュオンチャンネル完成式典に出席して

上 村 洸（物理学教室）

Thursday, 8 December, 1988  
You Are Invited to the Ceremonies  
Celebrating  
the Opening of TRIUMF's Newest Beam Line  
M9B  
which uses a Superconducting Magnet  
Contributed by Japan  
to Produce High Fluxes of Negative, Polarized Muons

### PROGRAMME

#### Invited Talks in the TRIUMF Auditorium

- 15:00 *The Physics of High  $T_c$  Superconductors*  
H. Kamimura, Chairman, Physics Dept., Tokyo University
- 15:40 *Muon-Catalysed Fusion*  
K. Crows, Lawrence Berkeley Laboratory
- 16:20  *$\mu$ SR - Applied Parity-Violation*  
J. Brewer, University of British Columbia
- 17:15 Opening Ceremony in Meson Hall

You are invited to watch from the mezzanine level in the Meson Hall. The distinguished guests will assemble beside the M9B beam line, and speak from there:

Dr. K. Kikuchi - Vice-President, KEK  
Prof. H. Kamimura - Tokyo University  
Prof. T. Yamazaki - Tokyo University  
Dr. J. Child - National Research Council  
Dr. C. Greenhill - Government of British Columbia  
Dr. B. Clayman - Chairman, TRIUMF Board of Management  
Mr. E. McRae - Mitsubishi Canada Ltd.  
Mr. N. Uchidori - President, Nycam  
Dr. E. Vogt - Director, TRIUMF

Official Ribbon-Cutting at Beam Line

永嶺謙忠氏が説明されたように、理学部中間子科学研究センターとトライアムフ研究所が中心となって建設してきた、日加協力事業の超伝導ミュオンチャンネルが昨年9月にめでたく完成し、昨年12月8日にリボンカットの式典がトライアムフ研究所で行なわれた。私は藤田宏理学部長の代理として理学部を代表して式典に出席した。

この協力事業は、山崎敏光原子核研究所長が、当時理学部の中間子科学実験施設長であった当時から計画され、日加両国がそれぞれ1億円ずつの予算をつぎこんで完成させたもので、トライアムフ研究所長 Eric Vogt 教授をはじめカナダ側の喜びと日本側に対する感謝の気持ちの大きいのは、正直言ってびっくりもし、また大変感激した。その一端を、私の拙い文で紹介するより、当日トライアムフ研究所の式典出席者（約百名）に配布された Vogt 教授によるアナウンスメントを原文のま

御報告と致したい。

なおこの事業については、昨年12月27日の日本経済新聞「科学技術」欄で詳しく紹介されている。またトライアムフ研究所に数日滞在して、当理学部の中間子科学研究センターをはじめ日本の諸大

学・研究所の研究者が国際舞台の中でその中心となって活発に研究を推進し、またその研究が国際的に高く評価されることを眼のあたりに見て実に嬉しく存じた次第である。



前列右から菊池健高エネルギー研副所長，筆者。  
後列右端 E. W. Vogt トライアムフ研究所長，右から4人目山崎敏光原子核研究所長

## 雑 感

増 田 久 弥（数学教室）

東北大学に6年間お世話になり2年前に東大に戻りました。

東北大学は“研究第一主義”を建学以来のモットーにしていますためか、雉の鳴き声のきこえる素晴らしい自然環境ならびによく整った物理的環境のもとで、快適に十分自分自身の勉強に集中させていただきました。数学教室は青葉山にあり、私は隣の山の八木山にすんでおりました。この二つの山の間は深い溪谷で、その間に長い橋がかかっておりました。家から大学までバスで15分かかりました。現在、大学まで1時間半かかり随分時間をロスしております。東京の住宅問題の深刻さを

実感しております。

\* \* \*

青葉山にある東北大学からもどった数日間に学生・助手時代ずいぶんお世話になった正門前の床屋さん、食堂のおばさんなどに会いまして、とっても懐かしい感情におそわれました。また生まれ育った教室は全く懐かしいものです。

私どもの教室では一昨年は伊藤清三先生、岩堀長慶先生、田村二郎先生がご退官、この3月藤田宏先生、木村俊房先生がご退官となります。学生時代に教えを受けた先生がつつぎおやめになられ寂しい限りです。他面新しい教室づくりの重大さ

を考えれば考えるほど重い責任を感じます。

\*

\*

東大の数学教室と東北大学数学教室との比較を、ということですが、私の狭い経験を思い付くまま述べてみます。

東大の学生はよく勉強する点、教官のほうも学生を大切に扱っている点よその大学に、一般的にあって、ぬきんでていると思います。学生も自身で問題を見つけて短期間のうちに解いたりで感心いたします。しかしこういう経験をしました。現在私のところに修士2年の院生が2名おります。ふたりとも立派な仕事をしましたが、そのひとは“先の見通しを考えて”就職してしまいます。残念な思いです。その学生は、大学院のときに東大にきた学生です。似たような経験を東北大学では私はよくいたしました。“違い”にはいりましょうか？

従来の結果をまとめるような仕事ではなく、真に新しい問題に進んで挑戦する野性味をもった学生がでるためには私どもが率先して野性味をもたねばとおもいます。

東北大学では私は数学だけをしてればよく“狭くとも深く”で十分通用しましたがそれだけでは東大では不十分で常に“全体的な視野”が要求されます。

東北大学と東大の3つ目の違いは周辺に多くの大学があることでしょう。私の専門は解析学ですが解析系統の一般セミナーだけで週4つも私どもの教室で開いております。東北大学では週一回が精一杯でした。セミナーといえば、物理教室の江口徹先生と数学教室の落合さんとでジョイントセミナーをしております。大変ダイナミックでうらやましくおもいます。私は非線形偏微分方程式を研究いたしており、とくにその重要な応用であるナビエ=ストークス方程式に興味があります。そのため、私もできますことなら物理の神部先生とジョイントセミナーができれば物理的側面をもっと把握できるのではないかと心密かに思って

おりますが私は腰が重いものでどうなることでしょうか。

\*

\*

東北大学と比べて東大は雑用が随分多いように思います。どうしたらよいか、名案はございませんが、たとえば、理学部にあるたくさん各委員会をもっと整理できないものでしょうか。

私は移ってすぐ理学院構想検討小委員会の委員になってしまい、一昨年は十数回も会議にでました。その結果がどうでありましょうか。スタッフの少ない教室の方は大変だとまったく同情いたします。無駄も多いのではないのでしょうか。

理学部教授会も長いですね。去年はだいたい1時半～5時が通例でした。これも、もっと短くできたら、とおもいます。(執行部は努力しているのかもしれませんが)。例えば、非常勤講師依頼、兼任・兼業なども教授会にでておりますがあのようなのはやめてはいかがでしょうか。

理系委員会に各教室2名出ておりますが1名にしてはいかがでしょうか。

東北大学理学部の教授会は前半は大学院関係の教授、後半は理学部のみの教授の出席でおこないます。これに習って、主任会議をこのようにできませんでしょうか(そのときは、系の委員会をやめにする)。

## 小柴昌俊先生の文化功労賞受賞によせて

折戸周治（物理学教室）

理学部名誉教授の小柴昌俊先生がこの度文化功労賞を授与されました。仁科賞、朝日賞に続く先生のこの受賞は当理学部にとっても大変喜ばしい事です。

小柴先生は昭和26年東京大学理学部物理学科を御卒業後、東京大学及びロチェスター大学大学院を経て学位を取得され、ロチェスター大学、シカゴ大学研究員、東京大学原子核研究所助教授を経て38年に本学部に着任されました。

先生は宇宙線、素粒子の分野にわたって先駆的、独創的な研究を数多く行ってこられました。なかでも宇宙線の超新星起源の指摘、原子核乾板による宇宙線相互作用の研究などが初期のお仕事として有名です。また素粒子物理の分野においては49年当時に電子・陽電子衝突実験の将来性を鋭く見抜かれ、理学部付属高エネルギー物理学実験施設の設定に尽力され、これによって国際協同実験DASPによる新粒子Pcの発見及びタウレプトンの確立、更にJADE実験によるグルーオンの発見、統一ゲージ理論の検証等の成果を可能にされました。この業績によって昭和60年にドイツ国大功労十字賞を授与されました。更に素粒子物理国際センター長として欧州原子核機構(CERN)の $e^+e^-$ 衝突装置LEPを用いた国際協同実験を発足させると共に、陽子崩壊、ニュートリノ天文学等の先鋭的な研究を行われました。

この陽子崩壊、ニュートリノ天文学の研究においてはこれまでも増して先生の大胆な発想、鋭い勘がきらめき、また次々と的中していったといえましょう。特に地下深くに巨大な水タンクを建設し、この内面に20インチの大きな光電子増倍管を敷き詰め、内部で起こる稀な現象をイメージしようという雄大な発想。また陽子崩壊の下限を押さえた後に、水中で停止した $\mu$ 中間子からの

崩壊の結果生じる電子がどうやら観測される事から、もう少しバックグラウンドを減らせば太陽からのニュートリノによる反跳電子の観測が可能になる事に気づき、その為の手段を強力に押し進められた事。これらの事が実って、タイミングよく発生した超新星からのニュートリノの検出によってニュートリノ天文学の幕を自らの手によって開けられました。まことに「見事」というしかありません。

私自身は他の研究の責任を負った事もあってこの研究に直接参加できなかったのは誠に残念ですが、近くで見ていて、先生から最後になってすばらしい教育を受けたと感謝しています。先生の教育は片々たる知識の授与に重きを置いたものではなく、研究者としての在り方を身を持って示すといったものでした。特に「本質的、独創的な研究を常に目指せ」、「その発想の種となり得る『たまご』を幾つか抱えていて考え続けろ」というのが私共が学生の頃に折にふれて言われた事です。

地下深く置かれた水タンクによる素粒子・宇宙線実験の発想のたまごはいつ抱えられたのかと伺った事がありますが、30年近くも前に先生がシカゴ大で原子核乾板による実験をやっている時に、乾板を保存するため宇宙線が少ない岩塩坑に行った際だそうです。その時ガイガーカウンターがほとんど鳴らない程バックグラウンドが低い事から、そこに例えば水槽を置いて光電子増倍管で眺めたら、何か稀な現象が見えるかもしれないと思ったそうです。またニュートリノ実験、ニュートリノ天文学に関しては、私共が大学院に入った頃に良く話題にされた覚えがあります。従って先生が30年近く暖め続けた2つのたまごが合体して、ニュートリノ天文学が生まれたというわけです。まさに先生の常日頃言われてきた研究者としての2つ

の心掛けが実に強力な方法論であった事を、自ら見事に実証されたわけです。我々同じ分野に志すものとしてこのお教えを心に刻み込んで及ばずながらも頑張り、またこの教えをこの実例と共に後世に伝えていきたいと思います。また先生の一層のご活躍をお祈り致します。

最後に、昭和元年にお生まれになり、特に旧人類の気質を色濃くお持ちになった小柴先生が昭和

最後の文化功労賞を受けられた事も誠に似つかわしく、巡り合わせとはいえ感慨深いものがございます。

尚、添えられた2枚の写真のうち上のものは今から26年前のもので、インド、ジャイプールにてネール首相、パウエル等と写っているもので、中央左の痩身の青年が若き小柴先生です。下の写真は昭和63年12月の近況です。



## 理学部研究ニュース

●日中地震予知共同観測 中国四川省中央部には、鮮水河断層、龍門山断層、安寧河断層の三大断層がY字型に分布しており、過去に何度も大地震が発生している。中国国家地震局、四川省地震局と協力してこの断層系上に2ヶ所の観測所を作り、本実験施設で開発した地下水中のRn濃度連続測定装置を設置し、3年前から共同観測を行っている。今春北京で開かれる日中地震学会合同大会において、その成果を発表する。脇田宏・野津憲治・佐野有司・金沢敏彦・五十嵐大二 1989年5月 (地殻化学)

●非経験的方法による結晶構造の理論的予言 物質の結晶構造を説明することは固体物理の長年の懸案だが、常行真司、塚田捷、青木秀夫、及び松井義人(岡山大)は、第一原理的な電子状態の計算から求めた原子間力を用いたシミュレーションにより、シリカ( $\text{SiO}_2$ 、地球の主成分、デバイス物理でも重要)の様々な結晶構造や相転移を再現・予言することに成功した。これは「計算物理」の手法の物質設計への可能性を開く一つの大きな成果で、Physical Review Letters 61巻7号(1988)に公表され、またNature誌の9月号News欄でも紹介されて高く評価された。常行真司・塚田捷・青木秀夫、松井義人(岡山大) 9月15日 (物理)

●アメリカ物理学会フェロー会員に選ばれる 上村洸教授を、1988年度において標記フェロー会員に選出した旨、アメリカ物理学会会長より本人及び藤田宏理学部長宛に通知があった。顕彰理由は以下の通り(原文のまま)。

“For contributions to the theoretical understanding of electron states in solid state systems and for promoting closer ties

between the Physical Society of Japan and the American Physical Society”

上村 洸 12月21日 (物理)

●電子注入型の銅酸化物高温超伝導体の発見 Nd (Pr, Smでも可), Ce, Cuからなる新しい酸化銅酸化物高温超伝導体(転移温度25K)を発見した。新超伝導体は従前の正孔注入型と異なり、電子注入型である。また構造的にも、頂点の酸素がない銅-酸素面を有するなど、新しい特徴が見い出され、高温超伝導の機構解明に重要なインパクトを与えることが期待される。また応用的にも、正孔注入型のもとは異なり、還元雰囲気あるいは真空下での線材化・薄膜化が可能となることから、この発見を契機により高温の転移温度を示す電子注入型新超伝導体の材料開発にも拍車がかかると思われる。1988年12月 高木英典・内田慎一(東大・工)、十倉好紀 (物理)

●ホルモン受容体の調節機構 脳下垂体ホルモンであるゴナドトロピンの受容体は生殖腺にあり、性成熟過程のゴナドトロピン受容体の増加はゴナドトロピンによるが、成熟後はゴナドトロピンが逆に受容体を減少させるダウンレギュレーションを行っていることをマウスで発見した。電顕オートラジオグラフィーや生化学的方法により、ホルモン-受容体複合体が細胞内に入るインターナリゼーションがダウンレギュレーションの重要な原因であることをつきとめた(Endocrinology誌などに発表)。筒井和義・清水明寿(広島大)、川島誠一郎 1月5日 (動物)

●固相化DNAプローブを用いての超高効率クロニング法を開発 HPLC用ゲルに30塩基程度の合成プローブを固定化、細胞から抽出されたD

NAより目的とする塩基配列を直接に単離，クロアニングする技術を理科大・小田（鈎）研と共同で開発した。2時間の分離操作は，従来行われていた数百万のブラークのスクリーニングに相当する。この手法の，mRNA，cDNAライブラリーへの適用を試みている。鶴井博理・和田昭允 1月9日（物理）

●国際共同研究 平成元年度より開始するヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラムの試験的事業として，新エネルギー・産業技術総合開発機構は，生体分野について「脳の高次機能」あるいは「分子認識・応答機能」に関する国際共同研究チームを募集し，“Molecular Recognition of Transfer RNA”をテーマとする日米共同研究チーム〔代表者，横山茂之（生物化学）；分担者，P. Schimmel（Massachusetts 工科大学），J.-P. Ebel（CNRS 分子細胞生物学研究所，Strasbourg）〕を含む4チームに対する助成を決定した。1月10日（生物化学）

● $\text{Ca}^{2+}$ によって制御される $\text{K}^+$ チャンネル 細胞の外からの情報に対応して細胞内で生理反応がおきる際， $\text{Ca}^{2+}$ が細胞内情報伝達物質の1つとして働くことが考えられている。今回パッチクランプの手法によって，汽水産車軸藻シラタマモの液胞膜上の $\text{K}^+$ チャンネル（ $\text{K}^+$ を選択的に透過させるタンパク質）が微量の $\text{Ca}^{2+}$ によって活性化される様子を1個のチャンネルのレベルで観察した。このことは，細胞外浸透圧の低下という情報が細胞内 $\text{Ca}^{2+}$ を介して細胞内 $\text{K}^+$ の放出をひきおこすという生理反応に，分子機構をあたえたのである。この成果は1月8～11日の国際ワークショップ“CALCIUM RESEARCH ON PLANT”（ハワイ）で発表された。且原真木・田沢仁（植物）

●第5回井上学術賞受賞 このたび第5回井上学術賞を佐藤勝彦助教授が受賞した。佐藤助教授は，

世界に先駆け素粒子相互作用の統一理論と宇宙論の密接な関係を明かにし，宇宙の創生，初期宇宙の進化の研究を進めてきた。今回の授賞はその中でも真空の相転移による指数関数的宇宙膨張理論（インフレーション理論）と宇宙の多重発生論等の業績が高く評価されたものである。佐藤勝彦 2月4日（物理）

●組換えDNAに関する日米科学技術協力事業 本事業は昭和55年に開始して以来，理学部が担当機関として企画および連絡調整に当たってきたが，来る3月に担当期間が終了することとなった。この間「宿主ベクター系の開発」や「組換え体における遺伝子発現の制御」などを主題とした10回のワークショップと，延べ11人の研究者派遣を実施し，日米の情報交流と共同研究の遂行に寄与してきた。飯野徹雄 2月6日（植物）

●太古代斜長岩 斜長岩は地球の太古代地帯および月高地に広く分布し，地殻生成研究の鍵をにぎっている。カナダ・オンタリオ地域に見られる斜長岩はSm-Nd法で27億年の年代を示す。その主要構成鉱物である斜長石のX線回折像の回折強度分布の特徴から冷却過程を推定することが出来た。NASAとの共同研究。市川潤一郎・田賀井篤平 3月（鉱物）

●海外学術調査 1988年度から3年間の予定で，オスロー大学，ブリティッシュコロンビア大学との共同研究〔広域多点観測によるオーロラ動態の研究〕がスタートした。本観測は1989～90年にかけて約1カ月間，2月20日打ち上げ予定のEXOS-D衛星の遠地点が北半球に移動し，衛星からのオーロラ観測が可能となる時期に実施するが，昨年7～8月，カナダ・アラスカ地域とノルウェー・スバルバード地域において，予備的な観測をかねて観測点候補地の調査を実施した。國分 征・小口 高・林 幹治・山本達人 2月9日（地物研）

●**原裸子植物の研究** 古生代に栄えて絶滅した原裸子植物は種子植物の直接の祖先と考えられるシダ植物であるが、一連の比較形態学的研究によってハナヤスリ科が生きた原裸子植物であることが確かめられた。これによって種子植物の起源と系統の解明に手掛りが得られる。この成果はTaxon誌(1988)などで公表した。加藤雅啓(植物園)

●**ミュオン核融合におけるアルファ付着現象の直接観測の成功** 1 cc D<sub>2</sub>/T<sub>2</sub> 混合液体(トリチウム濃度:30%)を用いたミュオン核融合の実験が行なわれ、ミュオン1個当たり100個近い核融合中性子が観測された上で、融合反応の後に放出されるアルファにミュオンが付着する状態(ミュオンヘリウム原子)からの特性X線を観測することに成功した。絶対値決定のための種々の校正実験が進行中で、ミュオン核融合からのエネルギー生産の上限が決まることになる。永嶺・渡辺・坂元・岩崎・三宅・西山・栗原(中間子)、松崎・石田(理研)、鳥養(山梨大工)、梅沢・工藤・棚瀬・加藤ほか(原研アイソトープ部)(中間子)

●**中間子科学研究センター整備計画の予算認められる** 平成元年度予算内示において、2年計画の初年度として、特別設置費「ミュオン実験装置」が認められた。超低速ミュオンファシリティ及びミュオン核融合実験装置が新たにつくられる他、理学部の方々に利用頂いている本郷と高エネルギー研分室とにまたがるデータ処理コンピューターも更新される。永嶺・西山・三宅・坂元・岩崎・福地(中間子)

●**窒素同位体比の測定** 微量の窒素の同位体比を測定するシステムを開発した。このシステムでは四重極質量分析をstaticな状態で用いて測定が行われるので、高い感度(～1 ng)が得られる。このようにして得られる窒素の同位体比は、隕石や惑星の起源を知るためのトレーサーとして重要な情報を与えると期待されている。杉浦直治(地球物理)

●**国際共同研究** 数学に於る国際共同研究はほとんどが個人単位(二名～数名)で進められている。1988年中に出版された当教室教官と外国人との主な共同研究は次の通りである。(いずれも1988年、カッコ内はページ。)

尚、数学では共著論文の著者名の順は通常アルファベット順である。)

- (1) E. Ghys, T. Tsuboi; Annales de l'Institut Fourier 38 (215-244)
- (2) S. Kotani, M. Krishna; J. Funct. Analysis 78 (390-405)
- (3) S. Kotani, B. Simons; Comm. Math. Physics 119 (403-429)
- (4) M. Gurtin, H. Matano; Quarterly of Applied Math. XLVI (301-317)
- (5) M. Flested, Jensen, T. Oshima, H. Schlichtkrull; Adv. Studies in Pure Math. 14 (651-660)
- (6) G. Anderson, Y. Ihara; Annals of Math. 128 (271-293)

(1)は一次元力学系間の共役写像、(2)はランダム・ポテンシャルをもつシュレディンガー方程式、(3)は帯状領域上のランダム・ヤコビ行列、(4)はequilibrium phase transition、(5)はユニタリ表現、(6)は高次元単数に関するそれぞれ先端的な研究である。(数学)

●**東レ科学技術賞受賞** このたび、第29回東レ科学技術賞を物理の鈴木増雄教授が受賞した。受賞テーマは「相転移の統計力学的研究」で、鈴木教授のコヒーレント異常法と超有効場理論という相転移の一般論の提唱が高く評価されたものである。鈴木増雄 3月27日(物理)

\* \* \* \*

「理学部研究ニュース」欄に掲載のそれぞれのニュースの詳細については、年次報告書等に紹介されておりますので、該当の教室・施設(ニュース末尾の( )内)に連絡して下さい。

## < 学部消息 >

昭和63年10月24日

理学部職員組合委員長

宮田元靖殿

理学部長

藤田 宏

### 助手の“大学院手当”支給状況是正 に関する書簡

去る7月下旬に貴職員組合によって、「助手の大学院手当の支給が然るべく行なわれていない。その事態を早急に改善されたい」との指摘と要望を頂きました。この御指摘を契機として調査したところ、確かに理学部の相当な数の助手について大学院手当、正確には、大学院学生の指導補助担当の任用に伴う調整給の支給の仕方開始の遅れの問題があることが判明しました。すなわち、いくつかの専攻において、学位取得等の学歴条件や6ヶ月以上の在任期間といったフォーマルな任用の要件を満たす助手について新規の大学院指導補助担当のための選考・推薦が複数年に亘り実施されていないことが明らかになりました。

理学部の助手の学問的な水準の高さおよび理学部に於ける大学院の比重の大きさから考えて、このような事態が存在したことは理学部長／理学系委員長として誠に不本意であり、該当した助手の人達の不遇に対し深く遺憾の意を表する次第です。

おくれはせながら、これらの人達についてそれぞれの専攻からの推薦を得て後、急遽、指導補助担当に任用することを求める上申を総長宛に行い、可及的に速やかな発令を願う努力をしました。幸い各方面の御理解もあって、該当者のすべてについて現在既に発令が行なわれています。

理学部において、助手は、職務上教授・助教授を補佐する存在にとどまらず、理学の最も活動的な部分を担う進新の学者であり、理学の未来を託すべき後継者であると私は考えています。この見地からいっても、助手の大学院手当に関しての上記の事態は、理学部に於て起こってはならない筈

のものでした。それにもかかわらず、生じた原因には、制度の懇切さの不足や関係者の迂闊さがあったことも否めませんが、昭和58年度から大学院指導補助担当助手の定数の管理が理学系から大学本部に移され、それにもなって年度毎の新規任用予定数の照会を理学部大学院掛から各専攻に行なわないことになったという変化を、いくつかの専攻で充分認識しなかったことが主な要因になっています。

これらの諸点を改め再発を防止するために、理学部として、また、理学系として戒心すべきことを理学部教授会・理学系委員会で強く要望しましたが、具体的な制度の改善の処置についても理学系委員会に諮っているところです。

以上を報告しますとともに、事態の解決の発端となった御指摘ならびに対応について頂いた御忠告に対し謝意を表するものであります。

敬 具

### 理学部職員組合委員長から理学部長への返書

理学部長

藤田 宏 殿

1988年11月15日

理学部職員組合委員長

宮田元靖

理学部職員組合は、本年7月、理学部助手の大学院手当の支給に関して、現に大学院学生の指導に当たっており、学歴・在任期間等支給の要件を十分に満たしておりながら、大学院手当の支給が大幅に遅れている例が少なからず存在することを指摘し、早急な事態の改善と、該当する助手の被った不利益に対する補助措置とを要求しましたが、その件に関して、10月24日付で理学部長から「助手の“大学院手当”支給状況是正に関する書簡」を受け取りました。

理学部職員組合は、

(1) 理学部長が、このような事態が生じたことに

に対し、遺憾の意を表明され、

(2) 理学部長をはじめとする理学部当局の方々が、事態の改善について努力され、

(a) 現在、該当者のすべてに対して大学院学生の指導補助担当任用の発令（大学院手当の支給）がおこなわれるにいたったこと、

(b) 特に手当支給遅延の著しかった者については一定の措置もなされたこと、

(3) 理学系委員会において具体的な手続が改善される予定であること、

に対し、理学部長をはじめとする理学部当局の方々の誠意と努力を評価するものです。

理学部長からの書簡にもありますように、今回の事態が生じた直接の原因は、昭和58年度から大学院指導補助担当助手の新規任用の推薦が各専攻に任せられるようになったという手続き変更に対する対応の不徹底にあり、その意味では、関係する各専攻主任と理学系委員長の責任が大きいと言わざるをえませんが、理学部職員組合は、この問題のより根本的な原因は、助手の位置づけの低さにあると考えています。つまり、理学部長が書簡の中で述べておられるように、「理学部において、助手は、職務上教授・助教授を補佐する存在にとどまらず、理学部の最も活動的な部分を担う新進の学者であり、理学の未来を託すべき後継者である」にもかかわらず、実際には助手がそれに見合う扱いを受けているわけではなく、そのための制度的保証もきわめて貧弱である、という問題が根本に存在していると考えます。

また、助手の大学院手当の問題に限りませんが、今後同様の事態を発生させないという観点からいえば、たんに制度上の問題だけでなく、制度を支え、その運用を円滑かつ確実にするものとして、例えば、理学部職員組合が以前から要求している事務職員の研修や職員相互の日常的な情報交換なども、その重要性があらためて認識される必要があるものと考えます。

理学部職員組合は、今回の事態をひとつの教訓として、今後、各方面で、大学における助手の位

置づけ、助手の果たすべき役割とそれを支える制度的保証に関して、活発に議論がおこなわれるようになることを希望するとともに、理学部職員組合としても、必要に応じて積極的な問題提起をおこなっていく所存です。

---

上記のような手紙のやりとりがありました。学部長からの書簡はわたしの責任で書いたものがありますが、理学部職員組合との話し合いで合意を得たものです。

すべての助手の待遇が常に公正に取扱われ、その所属する教室によってアンバランスがあるべきでないことは、いまさらいうまでもありません。今回のことについて、大学事務局はじめ理学部事務部、理学部職員組合その他関係者の皆さんが好意ある理解を示されたことについて感謝しています。

理学部長 藤田 宏

# 教授会メモ

63年12月21日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認  
 (2) 人事異動等報告  
 (3) 物品寄附の受入れについて  
 (4) 教務委員会報告  
 (5) 企画委員会報告  
 (6) 理学院計画委員会報告  
 (7) 総長選挙代議員の選出について  
 (8) その他

平成元年1月18日(水) 定例教授会

理学部化学本館5階講堂

- 議題 (1) 前回議事録承認  
 (2) 人事異動等報告  
 (3) 人事委員会報告  
 (4) 教務委員会報告  
 (5) 東京大学理学部規則の一部改正について  
 (6) 企画委員会報告  
 (7) 理学院計画委員会報告  
 (8) 理学部長候補者の選出について  
 (9) その他

元年2月15日(水) 定例教授会

理学部化学本館5階講堂

- 議題 (1) 前回議事録承認  
 (2) 人事異動等報告  
 (3) 奨学寄附金の受入れについて  
 (4) 学士入学について  
 (5) 学部学生の転学科について  
 (6) 学部学生の転学部(転出)について  
 (7) 人事委員会報告  
 (8) 会計委員会報告  
 (9) 企画委員会報告  
 (10) 理学院計画委員会報告  
 (11) 評議員の選出について  
 (12) 植物園長の選出について  
 (13) 素粒子物理国際センター長の選出について  
 (14) 中間子科学研究センター長の選出について  
 (15) 遺伝子実験施設長の選出について  
 (16) 企画委員会委員の選出について  
 (17) 人事委員会委員及び会計委員会委員の半数改選について  
 (18) その他

## 人事異動

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
人類	助教授	青木健一	63. 12. 1	昇任	国立遺伝学研究所助手から
化学	"	原口紘丞	"	"	名古屋大学教授へ
物理	講師	矢崎茂夫	63. 12. 16	"	助手から

(助手)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
植物	助手	佐藤和彦	63. 12. 1	配置換	教養学部助手から
"	"	茂木立志	"	採用	
天文研	"	半田利弘	"	"	
"	"	大橋正健	63. 12. 16	"	
"	"	中井直正	"	"	

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
天文研	助手	関口真木	63. 12. 16	採用	
"	"	吉田春夫	"	"	
物理	"	桑田真	63. 12. 1	昇任	工学部講師へ
化学	"	酒井陽一	63. 11. 20	休職	平成元. 10. 23まで
"	"	葉袋佳孝	63. 12. 3	休職更新	63. 12. 17まで
"	"	葉袋佳孝	63. 12. 18	復職	
中間子	"	久野良孝	63. 11. 30	辞職	
素粒子	"	森俊則	64. 1. 1	採用	
"	"	川越清以	"	"	
人類	"	齊藤成也	平成元. 2. 1	"	

(職員)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
事務部	人事掛主任	小林一男	63. 12. 1	昇任	新聞研究所庶務掛長へ
"	事務官	植木祐輔	"	配置換	附属病院総務課から
中間子	"	永井明子	64. 1. 1	採用	
情報	技官	佐藤安紀	"	転任	文部省大臣官房人事課へ

外国人客員研究員

所属	受入れ教官	国籍	氏名	現職	研究員期間	備考
情報科学科	後藤教授	中華人民共和国	TEH Hang <sup>Chuan</sup> 丁懐東	雲南工学院・講師	元. 2. 15 ~ 2. 2. 14	62. 12月教授会 報告済の変更 変更前期間 63. 1 ~ 12. 2で承 されたもの
物理学科	上村教授	連合王国	KO David Yu kkei 高 David 育基	エクセター大学研 究員	元. 1. 15 ~ 2. 1. 14	
物理学科	大塚助教授	中華人民共和国	ZHOU Zhi Ning 周治寧	北京大学準教授	元. 2. 1 ~ 2. 2. 28	
情報科学科	後藤教授	シンガポール	HIOE Willy 丘維禮	シンガポール国立 大学シニヤ・チュ ータ	元. 3. 1 ~ 2. 2. 28	
情報科学科	後藤教授	シンガポール	HENG, Aik Koan	シンガポール国立 大学助教授	元. 2. 25 ~ 元. 6. 30	
物理学科	大塚助教授	中華人民共和国	LU Da-hai 盧大海	北京大学講師	63. 11. 1 ~ 元. 3. 31	63. 7月教授会 報告済の変更; 変更前期間 63. 9. 11 ~ 64. 3. 1で了 承されたもの
生物化学科	酒井教授	フランス	PUDLES Julio	パリ大学教授	元. 2. 1 ~ 元. 6. 30	63. 3月教授会 報告済の延長; 延長前期間 63. 3. 1 ~ 元. 1. 31で了 承されたもの

## 理学博士の学位取得者

〔昭和63年11月28日付（2名）〕

専攻	氏名	論文題目
論文博士	山崎裕文	高臨界磁界超伝導化合物 $PbMo_6S_8$ および $Nb_3Sn$ の実用化に関する材料科学的 研究 — 超伝導線材製作のための基礎
論文博士	伊藤領介	重心系エネルギー52 GeV の電子・陽電子衝突における重い新クォークの探索

〔昭和63年12月19日付（5名）〕

論文博士	富永義人	車軸藻細胞における原形質流動の $Ca^{2+}$ , $K^+$ , $C_1$ による調節
論文博士	綿野泰行	同形孢子シダ植物における種の生殖様式と遺伝的構造
論文博士	中川正樹	確率的相違度を導入した構造解析的オンライン手書き日本語文字認識の研究
物理学	秋葉康之	核子あたり 14.5 GeV/C の $O + A$ 反応におけるエネルギー生成の測定
論文博士	中原早生	証明とプログラム, プログラム抽出の自然な一手法

〔平成元年1月30日付（8名）〕

論文博士	光本茂記	室内実験による海陸風と斜面風に関する研究
論文博士	加藤辰巳	サワオトリギ群の分類学的研究
相関理化学	桜井力	スズ (IV) カルコゲナイドの光物性の研究
論文博士	中村貴義	導電性ラングミュアープロジェクト膜に関する研究
論文博士	安藤清	グラフと補グラフ
植物学	朴龍睦	海岸砂丘地におけるメヒシバとオヒシバの分布に関する生理生態学的研究
論文博士	青山隆	気相, 液相, 固相からの半導体結晶成長
論文博士	海津聡	多くの小さい穴の境界上に半線形境界条件を課されたポアソン方程式の解の漸近挙動

## 海外渡航者

（6月以上）

所属	官職	氏名	渡航先	期間	目的
素粒子	助手	森俊則	スイス	元. 1. 18 ~ 3. 1. 17	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
化学	〃	中井俊一	アメリカ合衆国	元. 2. 27 ~ 3. 2. 26	地球化学の研究に従事するため
素粒子	〃	川越清以	スイス	64. 1. 6 ~ 2. 3. 31	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
数学	〃	戸瀬信之	フランス	元. 1. 27 ~ 元. 8. 31	パリ第13大学の超局所解析セミナーに参加及び超局所解析に関する共同研究実施のため

## 理学部長と理職の交渉

12月19日、1月13日、2月10日に理学部長と理学部職員組合（理職）の交渉が行われた。また、1月18日には技術系職員の組織化問題について理学部長との緊急懇談会があった。その主な内容は次のとおりである。

### 1. 技術系職員の組織化問題について

12月19日の交渉では、討論の不足を理由に、12月の教授会では技官の組織化をしないことを要求した。これに対し12月の教授会では経過報告だけで決定しない、12月26日に技術職員に対する説明会を開くと答えた。

1月13日の交渉では、理職の12月28日付の組織化案に対する反対声明に対し、1月中に案を本部に出さなければ一年延びる、小口委員会の案を大きく変えることはしない（小口案と心中する）、小口案でよければ1月18日の教授会に出す等と答え、理職に、1月18日までに小口案に同意するかどうか回答を迫った。1月18日の緊急懇談会では、5級昇格が従来どおり、内規については理職の案を尊重して検討を継続するという条件付きで本部に理学部案を出すことについて合意に達した。このあと、学部長は、理学部案と東大本部案が大きく食い違うようであれば組織化は撤回すると言明した。2月8日の庶務部長、人事課長の説明で理学部案には最終的に本部案の網がかかることが明確になり、2月10日の交渉では、理職が本部案と理学部案の大きな隔たりを問い、組織化の撤回を要求したのに対し、学部長は理学部の運用でなんとかできると答え、今後の努力の問題であり、撤回するほどの条件違反・障害出現は確認されていないと思うと述べた。さらに、理職は理学部の内規を組合との合意なしに本部に出さないように要求したのに対し、学部長は約束したことであるので相談すると述べた。

### 2. 理学院計画について

理職が経過説明を求めたのに対し、和田理学院計画委員長は、2月の教授会で中間素案の説明をし、教授会懇談会を経て3月の教授会で最終的に承認する。2月の教授会の後で中間素案の説明会を開いてもよい。そこで、職員等の意見を聞き素案に組み入れることが可能である等を述べた。概算要求については、文部省の研究教育の高度化のための調査費として次年度概算要求が認められていること、東大全体で調査書の概算要求をすることを明らかにした。事務組織については、教室全てをまとめて一つにする様なことは考えていな

い、現在の教室という単位は残ると述べた。

### 3. 教務職員の待遇改善について

教務職員の劣悪な待遇を訴え、28号俸以上の人の助手化などによる昇格と概算要求による教務職員全員の助手化への取り組みを要求した。事務長は概算要求は全員の助手化で出していると答えた。また、年金の算出が最後の年の5～7月の平均値に基づいており、今までの最後の半年の助手化では退職金は良くなっても、年金はかわらないことを指摘し、5月以前の助手化を要望した。学部長は助手のポストは本来の助手のための運用に支障がおこらないように考慮して、半年としていると述べた。

### 4. 事務系職員の昇格改善要求について

東職の「婦人事務職員の昇任・昇格について」および昇格についての要望書について理職が質問したのに対し、学部長は主旨は理解した、放置しておくのはよくない、理学部でもいずれば改善しなければならないと思っていると述べた。また、事務長は4・5級昇格についてはポストがあっても動かなければ影響がでると答えた。理職は4級昇格については教室の要請もあり、動かずに昇格できるよう工夫してほしいと要望した。また、理職が高位号俸者の昇格には移動が絶対が必要かと問うたのに対し、事務長は絶対とは言わないが、組織という枠があり、ふさがってれば、上に行けないということであると答えた。

### 5. 行（二）から行（一）への振り替えについて

事務長が組織化をからめて要求しているとして述べたのに対し、理職は本来行（一）とすべき人であり組織化以前からの問題で組織化を絡めるのはおかしいと反論した。事務長はこれを認め、4月以前にも振替ができるよう努力すると述べた。

### 6. 昇格問題について

理職は技術系職員の5・6級昇格、図書職員の5級昇格、行（二）職員の4級昇格について、名簿を提出し、昇格実現に向けて努力を要請した。

### 7. 奨励研究B申請書の入手方法について

今まで奨励研究Bの申請書は教室事務を通して理学部が一括して取り寄せていたのに、今年から、各人が取り寄せなくてはならなくなったことについて理由を問うたのに対し、学部長は期限がある事なので、すぐに調べると答えた。

## 編集後記

今年も理学部から15の方が停年あるいは定年を迎えて去っていかれる。4号は恒例のお別れの言葉と、送る言葉の特集である。年間4冊発行される広報の内で最も関心もたれ、広く読まれるのがこの4号である。

この4号をもって、私の広報編集担当の役目も終了する。広報委員は号館から1人ずつ出て、5年任期で、4年目に編集を担当するようになっている。この1年間をふり返ると、広報のことを考えない日は全くなかったといってよい。それほど気になるものであり、休む間がない。広報を発行するために私が実際に費した時間を合計すれば多分200時間以上になり、1日8時間労働に直すと1ヶ月以上になると思われる。参考までにいくつかの数字を紹介すれば、1年間で私が出した原稿依頼、校正依頼の書状の数は約400通、ゼロックスコピーの枚数は約900枚である。本年は20巻目で、1～4号の総頁数は140頁となり、写真や余白を除いた字数は約13.6万字、400字詰340枚に相当する。これを原稿、初稿、2稿と、少なくとも5回は目を通す。研究ニュースと学部消息を除いて、記事の総数は年間66。2号から始めた研究ニュースの総数は71となった。ちなみに印刷部数は2,250部である。

広報の存在意義についての意見を時々耳にすることがある。意義を認める人と、そうでない人がいて、それぞれにもっともな面がある。1年間広報の編集を担当してみようことは、意義を求めて発行していけば、それなりの効果の現われてくるような感触をもつことである。広報を生かすも、殺すも、作り方、使い方次第のような気がする。今後は1読者として広報を見守っていききたい。

---

### 編集：

高橋正征(植物)	内線	4474
佐藤勝彦(物理)		4207
横山茂之(生化)		4392
内藤周式(分光セ)		4600
田賀井篤平(鉱物)		4544